

# 横浜居留地のホテル史(1)

## (1859-1899)

澤 護

### はじめに

縁があって10数年のあいだ横浜に住んだ。そこは幕末時にフランス地域と呼ばれ、駐日二代公使レオン・ロッシュが居住したり、フランス領事館が置かれていた一角であった。最初のうちは、自分の住む地番にどのような人たちが居住して、どのような商社の変遷があったものかを調べていたのだが、その調査の過程で気になった事項は別にメモをとっていた。ホテルの項目もそのひとつであった。

近年、幕末・明治初年に刊行された旅行記や回想録が翻訳されて、それらの書の中に横浜居留地にあったホテル名が散見されるようになった。ところが、訳注の形で解説されるホテルの記事は、必ずしも正鵠を得ていないものが多く、なんらかの形でホテルに関する詳しい記載がなされないものかと思っていた。

外国人居留地という特異な社会の中で、どのようなホテルが開業され発展していったのか、それが居留地という特殊な環境とどう関わったのか、そこに見え隠れする人間にはいったいどんな人たちがいたのかなど、極めて興味深いものが潜んでいるはずだが、これまでホテルに関する通史的なものは刊行されなってきた。

もっとも、横浜居留地ホテルについての断片的な発表はいくつかあるが、手元に残されているかなり多くの資料とは実にさまざまな点で食い違

いがみられるところから、極めて基礎的な事実の確認をしながら、横浜居留地内ホテルの全体を明かにしようと思いついた。

本稿で取り扱う年代は1859年（安政6年）より居留地制度のなくなる1899年（明治32）の40年間だが、この間横浜居留地には大小合せて120軒ほどのホテルがあった。この中には、ホテルの建物自体は同じでありながら、経営者が代わるたびにホテルの名称が代わったものも少なくなかった。ホテルそのものとしては100軒を割り、1年平均では12・13軒のホテルが存在していたに過ぎなかった。

古い順にそれぞれのホテルについて解説をしたが、大手のホテルはもちろんのこと下宿と覚しいホテルに至っては、その正確な開（閉）業日は限定できず、さらにホテルの規模については皆目見当のつかないものも多い。これを補うため、旅行者の紀行、火災の記録、ホテル経営者となる人物の入・出港日などにも注目して、できうる限り事実の確証に努め、単なるホテル名の羅列は避けるように配慮した。そのため、一般には調査が難しいと考えられる幕末・明治初年の事項に関し、かなりの頁数がとられることになった。しかし、これにより多くの研究者を惑わしてきたホテル名やその開業時期などは、かなり明確になるものと信じている。

本研究論集34号（1988年6月）に「横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）」と題する一文を発表してあるため、あるホテルに関しては重複した記述もみられることになるはずである。

## 付記

年号については西暦で記載した。これは旧暦と新暦との誤りをなくしようと考えたからだが、必要によっては併記してある。太陽暦が採用されたのは明治5年12月3日（1873.1.1）である。

人名については慣用的な書き方を原則としたが、それぞれ括弧内に原綴りを補った。

1859年

日本が開港した年、上海や香港から一獲千金を夢見て横浜にやってきた大勢の外国人のために、まず多くの簡易食堂や安宿がそれなりの店を開いたことは容易に想像できるが、1859年に開業したホテルは今のところ知られていない。

明治25年に太田久好編の『横浜沿革誌』が刊行され、この中の安政6年(1859年)の項に「本町通ニ寺院ノ如キ平家一ヶ所、堅瓦・海鼠壁ノ平家ホテル一ヶ所建築成レリ」とし、1859年代には既に海鼠壁の立派なホテルがあったことを記録している。しかし、このホテルの名称も、また太田久好の記述が正しかったかも不明のまま残され、今日に至っている。

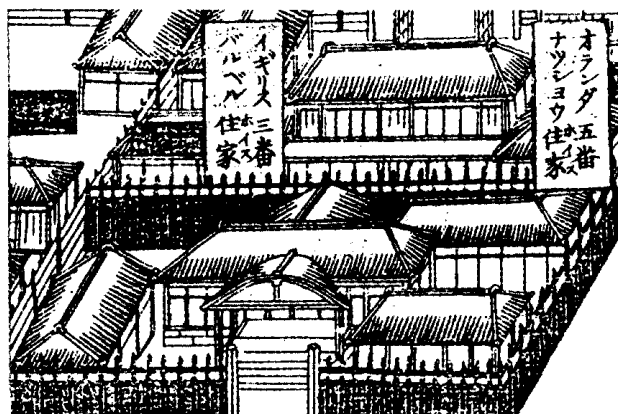
横浜を好んで描いた浮世絵師・五雲亭貞秀の万延元年(1860)作と思われる「横濱本町并ニ港崎町細見全図」、文久2年(1862)作と推定される「御開港横濱大絵図二編 外国人住宅図」、さらには「再改横濱風景」を抜けてみても、海鼠壁のホテルは特定できず、やけに居留地1番のジャーデン・マセソン商会の二階建て白壁造りが目につくばかりである。

1859年にあったとする「海鼠壁のホテル」を否定する根拠を持ち合わせていないが、それならばなぜ1860年代に来日した旅行者はこの「海鼠壁のホテル」に宿泊することなく、「あまり設備の良くない、急拵えの板張りホテル」だった「横浜ホテル」に逗留したり宿泊したもののなのであろうかとの疑問が生じる。この点は、少なくとも1859年代にはホテルと名の付くものはなく、1860年に入っても「横浜ホテル」ただ一軒しか横浜居留地内にはホテルはなかったことを意味している。この時には、「海鼠壁のホテル」はどうやら存在していないようである。もっとも「海鼠壁」とあるため、どっしりとした建物をつい連想してしまい勝ちだが、もともとは板張りの建物で、その一部が壁造りだったのかもしれない。

1860年には開業されていた「横浜ホテル」が、いつまでその開業日を遡ることができるかは後述するが、1860年や1861年には「横浜ホテル」しか

なく、しかもこのホテルが本町通りにあっただけに、「海鼠壁」には若干の疑問は残るにしろ、太田久好の「平家ホテル」とは「横浜ホテル」そのものだったと判断してよさそうである。もっとも、安政6年（1859）といっても、月によっては1860年にはまたがるだけに、この面も注目する必要があるだろう。

図版で示した絵は五雲亭貞秀の「外国人住宅図」の部分図だが、「オランダ五番 ナツショウ住家」とあるところが居留地70番にあたり、これが「横浜ホテル」の建物であった。



1860, 1861年

横浜ホテル

「横浜ホテル」の開業が1859年であったか、それとも1860年であったかの疑問はここでは残るにしても、このホテルが1860年には宿泊できる施設を持っていたことを示す記録がふたつある。ひとつは、1860年9月にオイレンブルグ伯の率いるプロシヤの東アジア遠征隊に、経済事情を主として視察するため、旗艦の「アルコナ」号 (Arkona) に便乗して来日したザクセン商業会議所全権の商人・シュピース (Gustave Spiess) の旅行記『1860年から1862年におけるプロイセンの東アジア遠征』(1864年刊)であり、もうひとつは、この東アジア遠征隊の公使に起用されたオイレンブルグ

(Friedrich Eulenburg) の『公式資料によるプロイセンの東アジア遠征』(1864年刊)の二書である。後書では、横浜を「Yokuhama」と書き、「Yokuhama-Hotel」としているが、読みいいように本稿では「横浜ホテル」と統一してある。

シュピースの乗った「アルコナ」号は1860年9月4日に入港し、彼は来日当初は江戸の赤羽根の接隅所に宿泊していたが、横浜に「それ相応のホテル」があることを知らされ、同行の地質学者リヒトホーフエン (Freiherr Richthofen)、ルチウス (Robert Lucius) 博士とともに3人が横浜に移る決心を固めた。

1860年9月16日の日曜日、シュピースらは江戸から7時間を費やし、目的のそれ相応のホテルに到着した。このホテルは、シュピースによれば、「フフナーゲル・ホテル」(das hotel Huffnagel) という広々とした日本家屋のホテルであった。シュピースの描くこのホテルの情景は、オイレンブルグのそれより遙かにきめ細かい描写で、それだけに生き生きとした筆致をみせている。

「このホテルそのものには、他の日本の木造造りの家屋とは違って、非常に風通しのよい、いわゆる食堂とそれと同じ特徴を備えたビリヤード室があったが、バー、つまり船などの放浪客のための酒場もあった。この地でたったひとつしかないこのビリヤードはかなりの賑いをみせていた。刺戟というものは、人間にとっては実に必要なものであるらしく、一ドルか半ドルを賭けた一種の賭球で満足されていた。

ふたつの広間は長い本館の側面に立ち、部屋と称する板囲いの八つの小室となっていて、狭いベランダから下の方に向かって通路があり、床上一フィート半の高さがあった。

窓はひとつもなく、また同様にストーブもなかった。このふたつがないため、湿冷の11月には、大雨が降ったり強風が吹き荒れたりするので

大層つらかった。

家具といえば、一種のベットとがっちりしたテーブル、それと二脚の支那の竹製の椅子があるだけであった。<sup>1)</sup>」

シュピースの描く横浜の「フフナーゲル・ホテル」は、今の目からみるとなんと荒寥殺伐としたもので、しかも部屋と称するものは、板で仕切った急拵えの小部屋で、窓もなくランプでの生活であったから、夜ともなるとビリヤードで賭けて楽しむか、ホテルに付随したあやしげな男たちのたむろすバーで飲み騒ぐかしかなかったわけだが、それでも旅行者は満足してここに滞在していた。たとえ、不満足であったとしても、旅人の泊まる場所はここしかなかったのだから、気に入らないといったところで行き場がなかったわけである。シュピースらにとっては、こんなホテルであっても、赤羽根の宿泊所よりも住み心地は遙かによかったのであった。

オイレンブルグの乗った「テーティス」号 (**Thetis**) は、1860年9月12日に神奈川の入江に投錨したが、彼ら一行は横浜にではなく江戸に滞在した。この年の10月7日に、米公使館書記官のヒュースケン (**Henry C. J. Heusken**) の案内でオイレンブルグらは横浜を訪れ、先のホテルにいたシュピースらと再会した。

「われわれは、仲間が当時建築中であった横浜ホテル (**Yokuhama-Hotel**) にいるのに出会った。このホテルは、かつて船長をしていたオランダ人が建てたもので、そう設備がよいとはいえないが、彼らは満足して宿泊していた。このホテルの建物の前面はすでに着工され、この冬中には完成する運びになっていた。三方に、一階建て家屋の建つかなり広い中庭には、多くの建築資材が野積みされたままだった。一方は食堂で、それに付随してビリヤード室と酒場があり、向かい側には小さいくつかの居間と寝室とが連なっている。その背後に、中央の建物と向かい合

せに建っているのが既舎である。すべてが急拵えの板張りで、半ば日本風、半ばヨーロッパ風の設備である。(このホテルの) なにもかもが当時はいまだ即製の歳の市の酒場のようであったが、厨房と地下室はよくできていて、宿の主人も信用のおける感じのよい男であった。給仕は(客が) めいめい自分たちでやった<sup>21</sup>」

ふたりの記述から「フフナーゲル・ホテル」(または「横浜ホテル」)を再現してみると、1860年に建ったばかりのこのホテルは木造で、ふたつの広間と八つの窓のない小部屋からなる一階建てのもので、その側に食堂とビリヤード室と酒場からなる建物が別に付随し、さらに既舎が中央建物の裏手にあったことになる。この段階では、いまだ横浜居留者のもうひとつの楽しみだったボーリング室は設けられていない。

混乱することを避けるために先に記述しておく、**「フフナーゲル・ホテル」**と**「横浜ホテル」**とは全く同じホテルで、**「横浜ホテル」**の経営者がフフナーゲル(C. J. Huffnagel)というオランダ人であったことから、シュピースは**「フフナーゲル・ホテル」**と呼称しただけのことである。

**「横浜ホテル」**が1860年9月には営業していたことはこれらの記録でわかるが、それではいつから開業していたのであろうか。1860年2月26日の夕刻、日本人街を散策していたオランダ人船長ふたりが斬殺される事件があったが、これについてヘボンは2月27日の日記でこう書いている。

「昨夜七、八時頃、しばらく逗留中の2人のオランダ人の船長が横浜のホテルを出て散歩に出掛けたのです。15分もたつたためうちに日本人に襲撃され……<sup>31</sup>」

ヘボンのいう**「横浜のホテル」**を、先の**「横浜ホテル」**とは別のホテルであったと仮定すれば、1860年中に2軒のホテルが横浜居留地にあったこ

とになる。しばらく逗留中とあるだけに、1859年中にオープンされた可能性もあるホテルである。したがって、この「横浜のホテル」を太田久好の記述した「堅瓦・海鼠ノ平家ホテル」と重ね合せて1859年にあったホテルだと推定すれば誠に都合がよいのだが、他に裏付け資料が全くない現時点では、そこまで飛躍してヘボンのいう「横浜のホテル」を「横浜ホテル」とは別の最も古いホテルだと推測するのには無理がある。

仮に、1860年初頭に「横浜ホテル」とは別に、もう一軒のホテルが横浜居留地にあったとすれば、この頃の旅行者の手記になぜこのホテル名が書かれていないのであろうか。また、シュピースらはどうしてこのホテルに泊まることもなく、安普請の「横浜ホテル」に投宿することになったのかといった疑問もでてくる。さらに、1860年2月の段階ではすでに開業されていた「横浜のホテル」のその後の消息は一切わからず、ホテル名さえ明らかにすることのできない理由は一体なぜなのであろうか。

オイレンブルグは、「横浜ホテル」が1860年10月にでき上がりつつあったと書いているが、この時点ですらホテルの施設はなおも建設中であったから、シュピースらが泊まった1860年9月中旬の段階では、このホテルはいまだ未完成のホテルだったことになる。

安普請の本館がまず最初に完成し、その後にレストランとビリヤード室が開かれ、さらに黒人のマコーリーが取り仕切るバーが併設されていたとすれば、1860年9月以前になんとか宿泊できる八室の小部屋からなるホテルがオープンしていたとしてもおかしくはない。

ヘボンの書く1860年2月の「横浜のホテル」も、実はシュピースやオイレンブルグが描く「横浜ホテル」と同一のものであったと判断すればむしろ筋は通り、「横浜のホテル」を無理にもう一軒の別のホテルと推定しないでもすむ。

それでは、太田久好のいう安政6年（1859）の「平家ホテル」を、どのように解釈したらよいのであろうか。オランダ人船長が殺害された1860年



2月26日を陰曆に直すと万延元年2月5日となるので、このホテルがもう1ヶ月ほど早く開業したとすれば安政6年にぶつかってもいき、安政6年=1859年創業という可能性さえでてくる。

しかし、これも図版で示した横浜ホテル「Yokuhama Hotel」の新聞広告をみれば否定しなければならない<sup>4)</sup>。この広告は上海で刊行されていた英字新聞に掲載された横浜ホテルの開業を伝えるもので、これまであれこれ記述してきた横浜居留地最初のホテル

**YOKUHAMA HOTEL—KANAGAWA.**

**T**HE undersigned begs to intimate that he has just opened the above establishment where families and others can be accommodated with comfortable Board and Lodging, in good style and at moderate charges.

The HOTEL is well furnished and beautifully situated, and, having now supplied a long recognized public want, the undersigned relies on the support of residents and visitors, to whose comfort and convenience every attention will be paid.

**C. J. HUFFNAGEL.**

9ju      Yokuhama, February 24th, 1860.

で、その開業日は1860年2月24日であり、その経営者はオランダ船籍の帆船・ナッソウ号 (Nassau) の元船長・フフナーゲルであった。

この広告によれば設備は用意万端整っているような印象を抱かせるが、旅行者のそれは相当に違っている。ただ、長い間の一般の要望に応えとした一文は、確かにその通りであったろう。

それでは、「横浜ホテル」は居留地のどこにあったのであろうか。残念なことに、先の広告や書物の中では記述されていないが、1860年のオイレンブルグ伯のプロシヤ使節に加わって来日したハイネ (Wilhelm Heine) の紀行文にこの場所が示されている。

ハイネはドイツのドレスデンに生まれた画家で、ペリー提督の日本遠征に加わって来日し、1856年には『日本遠征図絵』(“Graphic Scenes of the Japan Expedition”)を、1860年に『日本誌』(“Japan und seine Bewohner”)を既にかけていた。そのハイネが1860年にオイレンブルグやシュピースらと共に再び日本にやってきて、彼は日本人や日本の風土を観察し、それをスケッチしてオイレンブルグ伯一行と1861年2月に日本を

去った。ところが、プロイセン使節一行が中国に滞在中に、ハイネは一行と別れて別行動をとり、1861年7月30日に長崎を経由してまたも横浜に戻ってきた。

ハイネはサン・フランシスコへ向かう幸便を待つあいだ横浜に留まったが、彼の宿泊したところも「横浜ホテル」であった。彼は帰国後の1864年に『北半球周遊世界旅行——1860年と1861年の東アジア遠征随記——』を刊行したが、この紀行文の中で彼は次のように記述している。

「運上所（今でいう税関）からさほど遠くない所に、オランダ人のフフナーゲル氏はひとつのホテルを建てた。そこでは一日2ドル、月に50ドルで小さな部屋に宿泊でき、滋養に富んだ美味しい食事を一日に三度とることができ、また味のよい飲物も適当な値で手に入れられる。<sup>5)</sup>」

運上所に近いオランダ人のこのホテルを、貞秀の「外国人住宅図」や「再改横濱風景」に照し合わせてみると、後年イギリス郵便局、ジャーマン・クラブ、アメリカ領事館といった公共施設が建てられる一角と道を隔てた、本町通りと港通りとが交差する地所で、居留地70番であった。貞秀の「外国人住宅図」では「オランダ五番 ナツショウ住宅」となっているところで、「住宅図」をさらに大きく描いた「再改横濱風景」の版画をみると、それとなしにホテルとおぼしい木造家屋が木の柵に囲まれている。この居留地70番はかなり出入りの激しい、商社が次々と変わった地番だが、この面は後で触れることになるだろう。

港通りを挟んだ居留地70番の前は、1860年には日本人役人の長屋があった駒形町と呼ばれたところだが、公共施設が建てられるように取り決められるまでは、アメリカ人のショイヤー（Raphael Schoyer）らの投機の対象となった地所であった。ホテルとは直接的な関係はないが、この辺一帯を興味深げに観察し、居留地でのあちこちで見受けられる光景は、ヨー

ロッパ人の品位を落としていると嘆いたフランス人がいた。エメ・アンベール (Aimé Humbert) がその人である。

アンベールは1863年4月に長崎に着き、5月に入って横浜にやって来たが、帰国後の1870年に『描かれた日本』(“le Japon Illustré”)を編み、その中でこう語っている。

「町の中で最もすばらしい場所は、大通り、つまりメイン・ストリートと港通りが交差するところだが、ここはすでに縄張りが決まっていて、アメリカ人数人の投機屋たちの大胆で、しかもうまい儲け仕事の対象になっていた。この場所の中央に日本家屋の密集地帯があり、彼らアメリカ人は、自分たちの家を建てるまで、一時的にこれらの家を使わせて欲しいと幕府に願いでた。ところが、彼らはそれらの家をいったん手に入れると、すぐに小さく区切って、黒人、東洋人、白人たちにすっかり又貸しをし、ホテル、洗濯屋、フランス式のカフェ、肉屋、酒場、海員宿泊所といったものがここに店を開いた。そこでは、日中はもちろんのこと、夜間もたいていこれらの店の周辺は、さまざまの買物客で賑わっていた。<sup>6)</sup>」

なんんかかの旅行者の紀行文によって、「横浜ホテル」の輪郭はかなりはっきりしてきた。このホテルの持ち主を、ハイネは「オランダ人のフフナーゲル」としたのに対し、オイレンブルグは「かつて船長であったオランダ人」としているが、この点は、先述した通り同じ人物であった。

ナッソウ号の元船長・フフナーゲルによって1860年2月24日に開業された「横浜ホテル」は、1862年9月までは彼の手で経営されていた。しかし、1863年に入ると経営は思わしくなくなり、このホテルを年契約で賃貸する広告がショイヤーの手でなされるようになり、この年の9月にはホテルの他にこれに付随するいくつかの家屋の賃貸も同じショイヤーの

手で発表されているので、1863年における「横浜ホテル」の所有権はショイヤーの手に渡っていたものとみなされる。つまり、幕府より地所を借り受けていた地主のショイヤーに、地代を支払えなくなったたな子のフフナーゲルが、たな賃として「横浜ホテル」を差し押さえられた凶である。

ショイヤーは一度もホテル経営に乗りだしたことはなかったが、横浜居留地ではあれこれ話題の多い、かなり特異な人物であったので少し触れておきたい。

ショイヤー (Raphael Schoyer) はバルティモア生まれのユダヤ系アメリカ人で、60歳になるまでカルフォルニアに居住していたが、1859年に来日すると競売業を主とする商売を始めた。輸入業にも手をだしていたのはもちろんであるが、今日流のいい方をすれば土地ころがしで財を成していった。例えば、「横浜ホテル」のあった70番、堀割り側の88番、本村通りの97番、102番と106番、さらに124番、また山手の26番や57番などがショイヤーの借り受けていた地所であった。

1860年5月8日には、「外国人居留地之旧地と新地との間にある可成大門に近き海辺の地を余に附属し給うへし」と運上所に近い駒形町の長屋を貸し与えるよう願いで、さらに同年9月には「ヒフナーケルロスホーエルには家屋を売与へたり然るに余には何故に是を売らざる哉」と地所掛に申しでたりしている。ショイヤーに関わる土地紛争の文書はかなりの量があるが(『横浜市史』資料編四)、ここではショイヤーのもうひとつの横顔を紹介してみよう。

横浜で発行された欧字新聞は、1861年11月23日にハンサード (A. W. Hansard) によって発行された「ジャパン・ヘラルド」をもって嚆矢とするのが今日の定説だが、宣教師・バラ (Rev. J. H. Ballagh) の記憶によれば、横浜での最初の新聞発行人はショイヤーだったという。

「横浜における最初の新聞は、進取的なアメリカのユダヤ商人、ラファ

エル・ショイヤー氏によってだった。彼は現在横浜水道局の事務室が立っている本町通りと、波止場に通じる広い通りの交差する角の、趣味よく改造された日本式平家に住んでいた。そこから本町通りの西側、現在のアメリカ領事館の敷地の端まで、平家の日本家屋がずうっと軒を連ねていた。そこは酒場として貸し与えられ、あらゆる国籍の男たちによって営業されていたが、日曜日や祝日での往来たるや筆舌に絶する混雑と騒乱とがみられた。これらの場所をこういった目的のために使わせたことは、我々の知るショイヤー氏の最悪の面だった。彼の発行した新聞は一枚刷りの木版印刷のもので、原稿は手書きであった。その次に出たのが、ハンサード氏の「ジャパン・ヘラルド」だったように思う。この新聞が1864年に存在していたのを知っている。<sup>7)</sup>

バラの回想は1909（明治42）年のもので、彼は「ジャパン・ヘラルド」が1861年の発行でなく、もっと遅い発行と置いていたためこのような記述になったのであろう。ショイヤーが横浜で最初の新聞を発行したとする回想は他にもあるが、これらの回顧談ではいずれも新聞名を明らかにしてなく実証性には乏しい。

フランス外務省の古文書の中に、木版刷りの英字紙「ジャパン・エクスプレス」(The Japan Express)があり、これがショイヤーの発行した新聞であろうとして1862年7月12日付けが発表されたことがある。<sup>8)</sup>この文書には「ジャパン・エクスプレス」の3号分に相当するものが添付されているが、これらの日付からどう逆算しても1861年までは遡ることはできず、1862年5月頃の刊行としか想えない。

ワグマンの描く「ジャパン・パンチ」の1862年6月号の中に、「エクスプレス・オフィス」の文字が「ヘラルド・オフィス」と並んで描かれ、その「エクスプレス・オフィス」の気球に乗ったショイヤーの姿がある。さらに、1862年5月号には「トム・ソーヤー」の名前をもじってショイヤー

が刀かステッキを手にし、「ヘラルド」紙のハンサードに殴り込みをかけているとおぼしき光景なだけに、この頃に「エクスプレス」紙が発行されたと判断してみたい。

新聞発行人でもあったショイヤー宅に、下岡蓮杖が文久年間に住まい、写真術を教えてもらったらしいことが古老の話にでてくる。また、蓮杖自身がショイヤー夫人に油絵の技法を教わり、ショイヤーから金儲けの法を学んだと語っている。

ショイヤーについての逸話は多く、彼はいつも山椒の木のステッキを持っていて、船荷の積み下ろしの際には、人足たちをそれで打撲ることから恐れられていたし、また、ジャーディン・マセソン商会に雇われていた中国人の頭にピストルを付きつけ、「邪魔をするなら、一発お見舞いするぞ」と脅し、後日英一番館のホープと裁判で争うような事態を起こしては、居留民を驚かせたりしている。

そんな元気なショイヤーも、突然病魔に襲われた。1865年8月21日、イギリス領事館の法廷室で、横浜居留地の自治体であった居留地参事会の総会が開かれ、この席上でショイヤーは自治体の権限についてとうとうと演説した。ところが、この演説の直後に失神し、同席していたヘボン博士の治療の甲斐もなく、その数分後に彼の死は確認された。死因は卒中で、ショイヤー65歳であった。遺体は山手外人墓地に埋葬され、その後の遺言執行者には来日したばかりの建築家・ブリジェンスが指定された。

「横浜ホテル」は1863年9月の段階でショイヤーによる賃貸し広告はなされていたが、営業はそのまま続けられていたらしく、ビリヤード台が4台とボーリング・アレーが2台と増加をみせていた。さらに、1863年10月27日には、上海から来日したばかりのシモンズ (Washington D. Simmons) による奇術ショーが当ホテルで催された。奇術・手品ショーは横浜ではこれが最初のことであったが、これを最後に「横浜ホテル」は売りにだされた。この模様とその後の新しい経営者による「横浜ホテル」の

変遷については、項を改めて記述してある。

「横浜ホテル」の経営者だったフフナーゲルが、いつ頃このホテルから手を引いたか明らかにすることはできないが、1862年8月31日の彼の署名のある記録は残されている。しかし、文久2年(1862)9月の序をもつ『珍事五ヶ国横浜はなし』の居留地70番をみると「蘭 カブタイメン 異人旅籠屋」となっている。この点は文久3年のものと思われる『横浜みやげ 全』(これには年度の違う『横浜土産 初編』と『横はまみやげ』もある)、さらにほぼ時期を同じくする『横浜奇談 全』でも70番は「蘭 ハタゴヤカブタイメン」とあって、「横浜ホテル」の経営者はフフナーゲルの手を離れ、カブタイメンなる人物の手に渡っていることを示している。

しかしながら、幕末期の横浜を紹介した上記3冊の日本人の手になる木版刷りの小冊にのみみられる「オランダ人 カブタイメン」の姿は、他の資料には全く現われず、また原綴りさえ確定することもできないだけに、これらの書に掲げられている「外国人商館番附并人名」はいまひとつ全幅の信頼をおけないところがある。しかし『横浜奇談 全』(『美那登能波奈横浜奇談』綿港堂蔵)の中で、次のように「横浜ホテル」を描写している個所がある。

「異人のうちにて旅籠屋をするものあり。これハ家作を一ト間一ト間に部屋のごとくに造りて、渡来のもの上陸の節たよりすくなきもの、此はたごやへ止宿する也。もつとも旅宿料一宿分洋銀三枚我國の銀にて、中食ハドル壺枚なり。我国の旅籠料とハ格外の高料なり。其うちに五十畳敷ぐらいとも見ゆる大坐敷ありて、真中に長サ三間ばかり巾貳間ほどの机のやうなるものあり。廻りのふち高さ貳寸ほどにて、其すみずみに穴あり、其盤面に貳寸五分ぐらいの玉をおき、その玉を相手と替り替り棒を以て突バ、我玉と相手の玉とあたり合あたり合、その玉穴に入るの次第にて勝と見へたり、入らざるハ負なるべし。その手練の妙なる事、実におど

ろくべきの一寸なり。此の遊びハ我国の穴<sup>あな</sup>一とやらんに似よりたり。そのかたはらに洋銀を二百枚又ハ五百枚千枚も積置て賭とするなり。聖人の世に投壺の遊びもあれば、これらのためしにならうものか。惣て間毎々々の奇麗なる事ハ筆に尽したがたし。<sup>9)</sup>」(句読点は筆者)

一宿料金が3ドルとはかなりの値段だが、他に競争相手もない時期なだけに取り放題だったのであろう。ビリヤードにかなり関心をみせている描写がおもしろい。

香港で発行されていた居留外国人名簿ともいうべき『クロニクル・アンド・ディレクトリー』の1865年版を開くと、フフナーゲルはオランダ商社のアイスラー社 (Eisler & Co.) に雇われているが、1866年版ではもう同社にいない、1867年版の『チャイナ・ディレクトリー』を最後に彼の名前は完全に名簿から消えてしまった。ただ、「横浜ホテル」を辞めたあと、フフナーゲルは居留地107番に住んでいたらしいことが、先の『横浜みやげ』などに「百七番 蘭 ホフナカル」と書かれているのでわかる。この107番に関しては、本稿であとで取り上げられることになる地番だが、416坪を持つ広い地所であった。前田橋のすぐ側の107番、106番と110番は、この頃ゴープル (Jonathan Goble)、ブラウン (S. R. Brown)、ショイヤーらの住居でもあった。

フフナーゲル所有の「横浜ホテル」こそ横浜最古のホテルだったが、これに付随して酒場もあった。このバーも居留地では最も古いものだが、なんんかの証言を紹介してみる。

#### 「横浜ホテル」のバー

1860年の横浜にはただ一台のピアノもなく、娯楽といえはわずかの金を賭けてするビリヤードだけであったから、「横浜ホテル」のバーは、旅行者、居留者、船員たちの唯一の情報交換の場所となり、男たちの不満のは



け口を求める溜り場となっていた。したがって、口論や喧嘩は日常茶飯事で、時にはピストルの弾が行きかい、とても女性が近づくことのできないところであった。

1864年に新しい経営者によって「横浜ホテル」が開業されたとき、女性も安心して立ち寄れるホテルにして欲しいとの要望がだされたが、それにしても1860年から1862年におけるこの酒場は、西部劇の映画でみるバーとあまり大差はない。

1829年（文政12）に日本を追放されたフランツ・フォン・シーボルト（**Philipp Franz von Siebold**）は1860年（万延元）に再び日本の土を踏んだが、その翌年の3月に長崎より横浜にやってきた。この時の模様は彼の息子アレクサンダー・フォン・シーボルトの紀行に詳しいが、彼ら父子は約2ヶ月「横浜ホテル」に宿泊していた。

当時の横浜は、まず海岸通りに側って商社が建てられ、波止場に近い密集地帯の家屋ともどもその大半が一階建てのもので、しかもその一軒一軒の家の建つ敷地は黒く塗った柵で巡らされていたからなんとも陰気くさく、それだけにシーボルトの印象もよくない。少し長い引用になるが、「横浜ホテル」とそのバーがどんなものであったかは次の文でよくわかる。

「私たちは初めあるホテルに泊まっていたが、ここに滞在しているのはあまりにも心配だったので、父の意に染まらなかった。ここでの生活は専らマコーリー（**Macaulay**）という黒人のボーイがいるバーに集中していた。この男は後にはがんばって横浜の裕福な家主となったが、「マコーリー男爵」という綽名がつけられていた。このバーには、実にいろいろのあやしげな人たちが寄り集まっていて、時折夜遅くにピストルの試し撃ちなどが行こなわれ、愉快に時を過ごしていた。この場合には、いつもドアの上には掛かっている大時計が的がわりに用いられていた。

（一部略）

このホテルにはならず者もいれば、また面白い旅人もいた。まずウィルヘルム・ハイネ大佐がそうで、彼はかつてペリー提督の率いる米国使節団に付いてきた人で、日本遠征記の著者だが、私の父はこの書の批判を「日本に関する数々の誤謬」(Hundert und ein Irrtum über Japan)という題で書く積りだった。更に、ミハエル・バクーニン、彼はシベリアから脱走してきたロシアの煽動家だが、どうやらその際(ロシアの)その筋は見て見ぬふりをしていたらしい。彼はかなりの金を所持していて、彼と知り合いになった人々は全て、みなそれなりの深い感銘を覚えるのだった<sup>10)</sup>」

シーボルト父子が1861年に泊った「ある宿屋」とは、「横浜ホテル」(Yokohama-Hotel)であったことをアレクサンダー自身が『最終日本紀行』の中で明かにしている。彼ら父子は1861年3月から5月初旬にかけてと10月との二度「横浜ホテル」に泊まったが、二度目の時にはシーボルト父の門弟であった尾張出身の伊藤圭介と30年ぶりに再会している。

伊藤圭介(1803-1901)は、シーボルトに師事し、彼の強い影響を受けて植物学に専念し、日本最初の理学博士となり、後に東大教授となった人である。東京では本郷真砂町に住み、お雇いフランス人の医師であり、日本の植物の研究家であったポール・サヴァチエ(Paul Savatier)とも親交があったが、伊藤圭介もこの「横浜ホテル」に一泊した模様である。

ところで、先のハイネだが、彼は1861年7月末より9月中旬にかけての約50日間の大半をこの「横浜ホテル」で過ごした。ここで彼は、シベリヤに流刑となりながら、そこを脱走し箱館を經由して横浜にやってきた革命・煽動家のバクーニンと奇遇したのだった。

バクーニンの横浜着は1861年8月24日のことだが、彼らふたりは1849年5月のドレスデンの蜂起「五月革命」ですでに旧知の間柄だったから、マコーリーの酒場で酒を飲みかいながら大いに談論したのだったろう。この

恐ろしい怪しげなふたりの横浜滞在は居留地で話題となり、それがシーボルト父子の耳にも入って、先のようなアレクサンダーの筆となったわけである。

ハイネは早くにアメリカに向け発ちたいと思いつつも、1861年5月にサン・フランシスコへ向かって出港した「オンワード」号 (Onward) 以降なかなか幸便がみつからず、結局この年の9月まで横浜に留まることを余儀なくされた。9月17日にやっとのことでハイネはベイト商会のチャーター船「カーリントン」号 (Carrington) に乗船してサン・フランシスコへ向かったが、この船にはバクーニンも同船していた。ふたりは10月15日にサン・フランシスコに到着したが、洋上でのバクーニンの様子について、ハイネのいくつかの紀行文では全く触れられていないのは口惜しい。

船客や放浪者のための酒場で、時には時計を的にピストルの射撃が行われたマコーリーの酒場の様子は、その後も同じような情景が繰り返されていた。

1862年9月8日、19歳になって間もないアーネスト・サトウ (Ernest Satow) は通訳官のロバートソン、シンプソンらと共に「ランスフィールド」号 (Lancefield) に乗船して上海より来日したが、彼はイギリス公使館に落ち着くまでなかなか住まいが決まらず、約2ヶ月ほどホテルに仮り住まいをした。

「このホテルはおそろしく騒々しい場所である。朝の2時とか3時まで、言い争いやなぐり合い蹴り合いがおこなわれ、もっと始末がわるいのは、弾の行き先などおかまいなしにやたらと拳銃が発射されることである。」<sup>11)</sup>

これは1862年10月1日の項のサトウの日記で、彼はホテル名を明かにしていないが、この時にはまだ新しいホテルは居留地には開業されてい

いだけに、「横浜ホテル」とそのバーの情景描写であることがわかる。「横浜ホテル」のバーテンダーであったマコーリーは、1861年10月ごろにはこのバーを止めていたらしいことがアレクサンダー・シーボルトの紀行文にみられるが、シュピース、ハイネ、シーボルト、サトウの記録から横浜最古のバーの様子がひしひしと伝わってくる。

1860年から1862年にかけての寂莫たるバーの雰囲気は1863年に入っても続いた。しかし、1863年8月にP. & O. 社 (Peninsula and Oriental Steam Navigation Company, 以下P. & O. と略) が上海・横浜間に初めて定期郵船の航路を開き、欧州航路便と接続させるようになったことから、横浜居留地の生活は大きく変貌した。

2ヶ月余でヨーロッパの情報が横浜に伝えられ、輸出入の増大と共に人物往来は極めてひんぱんとなり、横浜港は活気に満ちていった。1863年暮れから急激に増えるバーとレストラン、そこで提供されるワインやウイスキーの種類の多様さは目を見張らさせるものがあり、さらにホテルの開業は相次いだ。音楽会や演劇会が催され、射撃、競馬クラブが結成されるといったように文化活動も積極性を増していったのも、定期郵船の寄港とは決して無縁ではなかったのである。この定期郵船の横浜寄港は、さらに1865年9月のフランス郵船、1867年1月のアメリカ郵船と相次ぎ、絹を中心に、お茶、蚕種などが飛躍的に輸出されていくようになった。

船舶の往来は従来かなり等閑視されていた分野のものだが、今後はこの面の調査・研究が非常に大きな重要性を持つようになることであろう。

『横浜開港見聞誌』の中のビリヤードを興ずる図があるが、文久2年(1862)の頃に含まれているだけに、「横浜ホテル」が開業した時にたった一台だけ所有していたビリヤード台を見て描いた図であったろう。ここでは「ケン玉」と紹介されているのはおもしろく、またわが国で最初のビリヤード場でもある。なお、ボーリング場を有するホテルとしては、次に述べる「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」が最も早く、1862年にはもうボー

リングを楽しめたことは記憶されてよいかと思う。

1860, 1861年に横浜にあったホテル

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

1862年

1862年10月以前、横浜居留地にホテルと名の付くものは「横浜ホテル」以外なかったが、この年度になってやっと二軒目のホテルがオープンされた。1861年(文久元)の横浜居留地の居留者数は外交官を除いて126名で、翌1862年に入っても150名ほどであったから、当座はホテルなどなくても、それほど不自由をしなかったのであろう。

1863年に入り、イギリスの郵船が定期的に入港するようになると、人物往来もひんぱんとなり、居留者数もこの年の暮れには300人と倍の数に増えていった。当然、ホテルや簡易食堂の需要は増大したはずだが、数の上ではそれほど目だった動きはない。これは、すでに店を開いていた商社や個人の家でも、短期間の滞在者に対しては、好意的に部屋を提供しもてなすということがあったからで、伝手を求めこれらに宿泊する旅人は多かったのであった。

ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル

1862年に入ると、「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」(Royal British Hotel)という大そうな名前を持ったホテルが開店した。この経営者は先にも少し触れたマコーリー(James B. Macaulay)という若いイギリス国籍の黒人で、通称「マコーリー男爵」と呼ばれた人気者であった。

1860年には既に横浜にいたマコーリーは、「横浜ホテル」の酒場から独立し、1862年7月をめどに居留地86番に喫茶室、ボーリング場を伴ったホテルの建設を始めたが、その開業は予定よりかなり遅れ1862年10月25日の

ことであつた。<sup>12)</sup>

このホテルの規模は明かではないが、ビリヤード室と一台のボーリングのレーがあった程度であつたから、さほど大きなものでなかつたであろう。しかしながら、ワグマンの絵によって、少なくとも木造二階建てであつたらしいことがわかり、またマコーリーの広告によって寝室はバス付きのものであつたから、婦人や家族連れが安心して泊まれるホテルと宣伝したのも、「横浜ホテル」や他の宿泊所などとは違うといった意気込みを窺わせている。また、当ホテルを「横浜ホテル」と混同しないよう訴えもしていたが、「横浜ホテル」より格が上との自負がマコーリーにはあつたのだろう。

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」を描いたワグマンの絵は<sup>13)</sup>「貞淑な女性」数名が玄関先に押しかけたが、6人の男たちがこれを押し留め、黒人のマコーリーが困惑している様子を描いている。絵からはこれ以上のことを知ることはできないが、ワグマンの諷刺の対象になつたからには、なにか女性がたむろすかの芳しくない事件がこのホテルに持ち上つていたとみなしたくなる。

残念なことに「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」に泊まつた旅行者の手記は全くない。これも無理からぬことで、1863年後半にはこのホテルを劇場に作り変えていたし、また1864年の6月には賄いなしの下宿にしようかとも思案していたからである。ただ、彼の所有するボーリング場とビリヤード・サロンだけは、なおも営業は続けられていた。

1863年9月23日、ロビオ (Signior Robbio) とシップ (R. Sipp) というふたりの音楽家が、それぞれ別の船で横浜にやつてきた。彼らは10月16日の夜に第1回目の演奏会をキングドン所有の大きな倉庫で150名の聴衆を集めて開いたのを皮切りに、10月中に4回の演奏会を開き、娯楽の極めて少なかつた居留民を魅了し大きな憩を与えた。この音楽会こそプロによる横浜居留地最初の演奏会だつたと思われるが、こういった演奏会場は86番の「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」の階上もそのひとつだつたもの

と考えられる。

長崎を経由して来港したロビオは優れたバイオリニストで、上海を経由してきたシップはピアノに技倆の冴えをみせた。シップは居留地に住む人々のために、特にピアノのための楽譜の写しを残していき、3回目の10月23日の演奏会ではピアノによる2曲の幻想曲を弾いて観客を魅惑した。

1860年に来港したシュピースの紀行文によると、当時の横浜には一台のピアノもなかったことが書かれているが、1863年にはどこかの家庭にピアノが持ち込まれていたことがこれでわかる。もっとも、横浜居留の商人ド・コニング カースト&レイの手で1862年1月4日に2台のピアノが売りにだされているだけに、1861年暮れにはもう輸入されていたことになる。

先の演奏会の折、横浜の男性アマチュア音楽家たちが出演したが、この頃ともなるとアマチュア音楽会が催されたり、またアマチュア演劇会が開かれるようになり、新開地横浜も索莫たる退屈な生活から少しは文化性に富んだ娯楽が芽生えてきたわけである。1863年はこのような面でも、かなり注目すべき年度なのである。

1864年6月になると、居留地内に二軒の新しいホテル——「タイクーン・ホテル」と「オテル・ド・リョーヨップ」——が開業されることになり、マコーリーはホテル業から手を引くことにして、1864年8月30日をもって「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」の看板を下ろした。しかし、このホテルは同年10月に入ると、「コマーシャル・ホテル」と名称を改め、別の経営者によって再びオープンされることになった。

ホテルから身を引いたマコーリーは、スミス (R. J. Smith) と手を組んで1864年末から1867年にかけて貸し馬車業と仲買いを職業としていた。この地番は明確ではないが、居留地129番だったと判断される。「バロン・マコーリー」の名前は、1872年版の「ディレクトリー」では130番に商人として掲載されているが、1873年版以降は完全に姿を消してしまうことになる。マコーリーは1872年7月24日に横浜を出港したP. & O.の「アヴォ

カ」号に乗船して日本を去ってしまったからである。マコーリー 39歳の働き盛りであった。

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」は、当時の居留地を調査する上で決して見逃がすことのできない『クロニクル・アンド・ディレクトリー』などの1864年や1865年版に全く記載されていないこともあって、これまでほとんど記録されることもないままに終わっていたホテルである。しかし、1862年10月から1864年8月までの約2年間、居留地86番にあったホテルで、「横浜ホテル」に次で二番目に古いものであった。居留地86番は約500坪の地所だが、「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」はそのうちの250坪余の86番Aに本町通りに面して建てられていた。なお、アレクサンダー・シーボルトは、「横浜ホテル」を辞めた後マコーリーは「横浜の裕福な家主」となったと書いたが、これはホテルの持ち主となったことを指したものと判断される。

1862年に横浜にあったホテル

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」(Royal British Hotel 86番)

1863年

この年、新しいホテルとして「オテル・デュ・ジャポン」と「アングロ・サクソン・ホテル」がオープンされ、横浜居留地はこの年度4軒のホテルを数えた。しかし、この新規開業のホテルは1864年中には閉店を余儀なくされ、また「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」にしても、この年の秋には劇場に模様替えをしていく状況であったから、ホテルの経営を軌道にのせるのは極めて難しいことだったわけである。

居留地社会ではレガッタ大会や陸上競技大会が開催され大いに賑わった年だが、一方では港には20隻ほどの連合艦隊の軍艦がたえず停泊して活気



をみせていた。このため娯楽が求められるようになり、アマチュア音楽会、プロによるピアノやヴァイオリンの演奏会、さらには奇術の興行なども行われるといったように音楽・演劇活動が盛んになっていった。

#### オテル・デュ・ジャポン

1863年9月26日から翌1864年4月2日にかけての新聞広告に、かつて図版で示したことのある「新しいホテル」と称するホテル名が掲載されている。<sup>14)</sup> 少なくともシャティオンは人名なので、「シャティオン・ホテル」と称したとも考えられるが、まず「オテル・デュ・ジャポン」(Hôtel du Japon) だったと断定してよいかと思える。

広告ではホテルの地番を明記していないが、「フランスのコンセッション」と記載されているからには、フランスが幕府より借り受けた地所のどこかに建築されたものとみなしたくなる。

フランス総領事(後に公使)のド・ベルクール(Duchesne de Bellecourt)は、横浜居留地の分割に関し五カ国均分案を提案して、1860年5月10日(万延元年閏3月20日)に居留地の中心部に当たる9, 10, 30, 31, 60, 61, 80および81番の総坪6,733坪の地所の貸与が認められ、大いに満足の意を表わした。この地所は当時フランス地域といわれたものだが、どう調べてみても、これらの地番のいずれかに「シャティオン・ホテル」が建築されたとみなされる形跡はない。

横浜居留地に関する地所規則は万延元年(1860)に制定され、さらに元治元年(1864)に2回目の地所規則が締結されたが、フランスは他国とはかなり異なる独自の居留地を形成していた。例えば、フランスが借り受けていた地代の支払い方法にしても、ド・ベルクールが一括して神奈川奉行に支払っていたり、土地の分配にしても、フランス人だけが参加して入札できるせり売り(せり貸し)をなん度となく実施しては、他国から非難されたりもしていた。

したがって、新聞広告にある「フレンチ・コンセッション」とは、このような特異な土地分配か、新しく埋め立てられた沼沢地、おおよそ2千坪の地所（**Swamp Settlement**）のいずれかに関わるものと考えられる。とすれば、「シャティヨン・ホテル」のあった地番は、かなり限定されてくることになる。

この地番を決定しようと調べていた過程で、シャティヨンが建てた「新しいホテル」とは、実は「オテル・デュ・ジャポン」という名を持つホテルではなかったのかと考えるに至った。「オテル・デュ・ジャポン」が1863年秋から1864年春にかけて存在していたのは間違いなく、シャティヨンが1864年5月27日に横浜を去った後では、もうこのホテルはみあたらなくなってしまふからである。

1864年1月20日、ロス（**T. J. Ross**）は居留地97番に婦人用品、靴、煙草などを商う雑貨店を開いたが、この店は「オテル・デュ・ジャポン」の向かい側にあった。この97番はクリフトン（**Samuel Clifton**）の経営する洋装店があり、スミス（**Geoge Smith**）の洋酒店が開店されたり、さらにロスが手懸ける「ホテル・ド・リョーロップ」（欧州ホテル）がオープンされていく地番で、わずか一步銀で奉行より家を借りては高くまた貸しをすると非難されたショイヤーが入手していた地所なだけに、出入りがかなり激しいものがある。

「オテル・デュ・ジャポン」が97番の向かい側にあったとすれば、そこは本村通りを挟んだ新しい埋め立て地で、フランス地域の168番（後の187番）だったとみなされる。1864年5月にリズレーが102番に乗馬学校を設立した時、「オテル・デュ・ジャポンの向かい側、オテル・ド・リョーロップの隣り<sup>15)</sup>」と宣伝しており、少し後のリズレーの広告では「グラン・カフェ・デュ・ジャポン」（**Grand Café du Japon**）の向かい側としている。

「グラン・カフェ・デュ・ジャポン」はフランス人・デュマルセ（**A. Dumarcet**）の経営した洋酒販売店で居留地168番にあったから、このホテ

ルも 168 番にあったと判断できる。

「オテル・デュ・ジャポン」そのものの規模や様子を伝える記録は一切ないが、この年の秋には水屋や瓦屋を手懸けて名を残すジェラルール (A. Gérard) がこの場所で商売を始め、さらにルイ (S. J. Louis) がフランスパン店を開くといったように、しばらくの間フランス人がらみの動向が繁くみられる地番であった。

ジェラルールが最初に食料品店を開いたのがこの 168 番で、1864 年 9 月のことだったが、後に主に中国人を住まわせる長屋を所有するようになった。この長屋が「オテル・デュ・ジャポン」の廃業後の姿だったとみなされる。

#### アングロ・サクソン・ホテル

1862 年 12 月 2 日、当時としては非常に大型のイギリス船「リームーン」号 (Lyemoon, 1,002 トン) が上海より横浜港に入港した。この船は 1863 年 7 月 18 日にも来港したが、同船で給仕頭として働いていた者にジョン・トーマス (John Thomas) という男がいた。このトーマスが、「アングロ・サクソン・ホテル」(Anglo-Saxon Hotel) の経営者となる人物である。

「横浜ホテル」の経営者がオランダ人船長であったと書かれているように、横浜のホテルやレストランの経営者には、船員上りのコックやステュワードが多くいたのは事実であった。

「アングロ・サクソン・ホテル」の開業日ははっきりしないが、1863 年 10 月初旬のことであった。これには「ジャパン・コマーシャル・ニュース」の 1863 年 11 月中の広告を、日本語に訳して記録したものがある。

「一 エングロサクシュホテル旅籠屋、是は本通横濱ホテルの隣家たり、日本新聞紙を出版する家に近き處なり。元蒸気ライムル船賄頭ジョンストーマス、謹て左件を公にせん事を求む。則上に述る旅籠屋を士官等の為に開きて、弗客に真実を盡して名誉を得んと

する事。

- 一 酒類其他極上物を彼の店に商う事。
- 一 飯時は西洋第四時なり。誂物は何の日何時にも注文次第に為すへし。
- 一 馳走の注文は速に調ふへし其主たる者は即ジョンストーマスなり。<sup>16)</sup>」

この新聞の原紙が残存していないため、どこまで正確な訳であったか不明だが、ジャパン・ヘラルド紙の1863年10月3日広告では、本町通りに面し、波止場に至る通りの向かい側としている。

「横浜ホテル」の隣りとしている先の広告からすれば、このホテルの地番は71番ということになるが、71番と断定するにはいまひとつ記録が欲しい気がする。居留地内では破産をしたり代替わりをした際には、新聞広告をだして一般に衆知をしたものだが、この71番の家屋の売り広告や貸し広告はホテルの閉鎖後であってもみあたらず、1864年1月に設立した仲買人のブランド（Charles S. Bland）の名前が71番にみられるに過ぎない。71番は665坪もの広い地所であったから、このホテルの破産後にもう少し動きがなければならない。

1864年4月14日、ホテルの経営者トーマスの破産が報じられ、さらに次の所有者となったブール（Sebastian San Buhl）の破産も1864年6月1日に公表された。これらふたつの破産公知には地番の記載はないが、ことによったら次の貸し広告が「アングロ・サクソン・ホテル」の規模を伝えるものではなかったのかと考えられる。

居留地41番にあったマークス商会（A. Marks & Co.）は、1864年5月21日から6月11日にかけて、「イギリス領事館に近く、部屋数6室、浴室、厩舎と離れ屋と伴った家屋」の貸し広告をだした。<sup>17)</sup>この広告は7月に入って再びマークス商会の手でだされるが、この頃スミス・アルチャー商会（Smith

Archer & Co.) やバビアー (E. Bavier) によっても同じ物件と思える貸し  
 広告がひんぱんにみられるだけに、このホテルの借り手を捜していたものと  
 予想される。一応71番にあったホテルと考えて間違いがなさそうである。

1863年10月にオープンされた「アングロ・サクソン・ホテル」は、わず  
 か半年たらずで閉鎖された。もっとも、1864年4月のジョン・トーマスの  
 財産処分の公示からみて、ことによつたらもう少し早い時期に閉業に追い  
 込まれた可能性すらある。また、経営者にしても早くからトーマスより  
 ブールに受け継がれていた様子もうかがえるが、そのブールにしても同じ  
 年の6月には財産処分を受けるはめになっている。部屋数6室の軍人や船  
 員ら男達専用のホテルとなれば、開業前からその限界はおのずから予測さ  
 れていたといえるようである。

「アングロ・サクソン・ホテル」の看板がみえ、その玄関先に数十名の男  
 たちが居並ぶ写真が発表されている。<sup>18)</sup> どうやらホテル開業を祝う集合写真  
 らしいが、これで見ると瓦葺きの屋根で、入口付近は一部二階建てだった  
 ようである。通りをはさんだ51番付近は工事中とみえ瓦礫の山が写しださ  
 れ、開港まだ間がない雰囲気を書し伝えている。

1863年に横浜にあったホテル

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」(Royal British Hotel 86番)

「オテル・デュ・ジャポン」(Hôtel du Japon 168番)

「アングロ・サクソン・ホテル」(Anglo-Saxon Hotel 71番)

1864年

この年度におけるホテルは8軒を数えたが、「アングロ・サクソン・ホテ  
 ル」と「オテル・デュ・ジャポン」が閉業し、「オテル・ド・リョーロップ」  
 が「オテル・デ・コロニー」へ、さらに「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテ

ル」が「コマーシャル・ホテル」へ名称が変更された。したがって、ホテルの実数は前年度と変わらず同数の4軒があっただけに過ぎなかった。

#### 新しい「横浜ホテル」

1863年11月26日、「横浜ホテル」はボーリング・アレー、ビリヤード台などを含めての全施設が、英字新聞「ジャパンヘラルド」の発行人であり、同時に最も早くから競売業にも手をだしていたハンサードによって公開の競売にかけられた。公開オークションで競り落としたのはバーソレン(Bertholen)という人物であったが、この新しい「横浜ホテル」の所有者はこの時点では上海にいたので、別人が入札に参加していたことになる。その人物は、後日「横浜ホテル」の共同所有者となるダニエル・リンチ(Daniel H. Lynch)であったはずで、彼は1863年11月14日に上海より横浜に到着していた。

バーソレンは「横浜ホテル」の所有権を握った11月28日には新聞広告をだし、ホテルの手直しをするため数日閉業することを伝えただけで、実際にはこのホテルを経営することもなく、リンチとカリエール(G. H. Carrière)に譲渡した。複雑になるのを避けるために、この3人の動向を示しておく。

リンチ 1863. 11. 14 上海より来港。

カリエール 1863. 12. 18      ♪      ♪

バーソレン 1864. 1. 11      ♪      ♪

リンチ 1863. 12. 2 サン・フランシスコへ出港。

カリエール 1864. 1. 1 上海へ出港。

バーソレン 1864. 3. 1      ♪      ♪

リンチ 1864.6.6 上海より再来港。

カリエール 1864.1.27 〃 〃

この3人の往来をみると、まず上海で「横浜ホテル」を買い取ろうという話し合いがもたれ、横浜でカリエールとバーソレンの談合があったものとみなされる。

新しい経営者カリエールとリンチによる「横浜ホテル」は1864年2月1日開業予定であったが、実際には2月20日夕方のオープンとなった。<sup>19)</sup>リンチはアメリカでも指折りのビリヤードの腕前だったというので、彼がビリヤードとボーリング・サロンの実質上の責任者となり、ホテルそのものの経営はカリエールが担当したのであった。翌3月にはファーガソン (Henry P. Ferguson) よる理容院がここに併設され、さらに6月1日よりフランス人・ヴァシャルド (Vaschalde) が経営するレストランも開店され、名実共に横浜一のホテルとして成長した。

新しい「横浜ホテル」の開店当初はビリヤード・サロンとバーの経営に力が注がれていたが、ヴァシャルドの経営するレストラン「ア・ラ・ヴェリー」(à la Very) の2部屋よりなる明るく落ち着いた雰囲気は居留民により歓迎され、ここで提供される食事やアイスクリームは大いに喜ばれたこともあって、これに気をよくしたカリエールは寝室の数を増やす計画を立てるほどであった。

「横浜ホテル」のレストランは、1864年中だけでもペレ (Adian Pellet), ダメール (Louis Damele) などに代替わりをし、また1865年10月には理容院が居留地51番に移転することなどはあったが、それでも「横浜ホテル」は順調に経営されていた。

1866年11月26日、横浜は未曾有の火の海に包まれた。俗にいう豚屋火事だが、この火災により「横浜ホテル」は完全に焼失してしまった。この火事のあった折、カリエールは上海へ旅行中であったが、12月に戻った彼

は焼け跡地に立って呆然自失となるのであった。

居留地 70 番から焼けだされたカリエールらは、とりあえずこの年の 12 月初めに、かつてアラード・ゴルディ商会 (Allard & Goldie) があった 171 番にカリエール商会の仮店舗を開き、ここで輸入品の販売を業種とすることにした。

しかし、館主のカリエールは 1867 年 5 月 25 日に日本を離れてしまったため、後に残ったリンチはカリエール商会をこの年の 5 月 28 日に 102 番に移転させた。リンチの移った 102 番には、「アメリカン・ハウス」(American House) という簡易食堂があったが、このハウスの持ち主だったカンベル (J. O. Cambelle) が一時不在になるため、リンチが代ってこの店の経営をまかされることになったようである。

「アメリカン・ハウス」は極く短期間で店を閉じてしまうことになり、リンチも日本を去った。このようにして、横浜居留地最初の「横浜ホテル」の経営をしてきたカリエールもリンチも横浜から去り、ホテルそのものさえ消え去ってしまった。

#### オテル・ド・リョーロップ

1864 年 5 月 15 日をめどにオープンを目指していた「オテル・ド・リョーロップ」(欧州ホテル) は、約 40 日遅れた 6 月 25 日に開業されたが、これは「タイクーン・ホテル」と全く同じ日のオープンとなった。このホテルは居留地 97 番で雑貨店を開いていたジョゼフ・ロス (Joseph Ross) によって経営されることになったが、読書室と談話室を伴った赤いカーペットを敷きつめたサロン、6 台のビリヤード台を持つ部屋、雰囲気の良いバー、清潔な家具付きの寝室 18 室とからなり、特に食堂は食通の間でも評判だったフランス人コックの料理が楽しめることで広く歓迎された。

「タイクーン・ホテル」のように男性客を専門に泊めたホテルとは違い、家族連れにも開放され、宿泊料を安く押さえ、後日さらに美容院も付随し



て設けられるといったように、横浜では「横浜ホテル」と並ぶ新しいホテルの誕生であった。

このホテルの位置は、最初の広告にあっては地番は明記されていないが、97番の一角に新築されたホテルで、工事の遅れから開店が予定より1カ月以上も遅れることになった。

「オテル・ド・リョーロップ」が新築された時、クリフトン洋装店が97番Aにあったので、ホテルの方は97番Bの270坪の敷地内に建築されたのであった。道を挟んだ向かい側には「オテル・デュ・ジャポン」(日本ホテル)があったため、日本より欧州の方が大きいと、欧州ホテルと名付けて宣伝したわけである。

ホテル経営が順調にいけば、部屋数を30室まで増やし大規模なホテルにする計画を持っていたロスだが、新規開業してわずか3カ月たらずでホテル経営から手を引き、このホテルはふたりのフランス人に賃貸しされることになった。新しいフランス人の経営者は、これを「オテル・デ・コロニー」(「植民地ホテル」)と改称し、この11月1日にオープンしたものの<sup>2.1)</sup>、翌年2月には早くも別の地番に移転してしまった。<sup>2.2)</sup>

1865年(慶応4)2月に経営者のいなくなった97番Bのホテルは、持ち主のロスの手で再び経営されることになり、かつての名称「オテル・ド・リョーロップ」で再開された。しかし、ロスの経営していた雑貨商の方はかなりの負債がたまり、今またホテルのたな賃が入らなくなった彼の経済状態は悪化し、この打開策として商っていた洋品、靴、手袋、香水といった品物のバーゲン・セールが1865年3月にこのホテルで開かれた。

「オテル・ド・リョーロップ」の名称とロスの名前は、1867年版の『チャイナ・ディレクトリー』にもみられるが、実際には1864年6月より1866年6月まで営業されていただけで、しかもこの間の約3カ月半は「オテル・デ・コロニー」としてフランス人に賃貸しされていたのであった。

ファミリー・ホテルとして居留地では好意的に迎えられた「オテル・ド・

リョーロッパ」だったが、1865年3月のロスの雑貨店の破産がこのホテルにも響き、翌1866年6月まで開店休業の様相をみせていた。

1866年（慶応2）6月に入り、新しい持ち主となるホワイト夫人が、103番で経営していた「オテル・ド・パリ」を閉業すると、97番に移転してきて「インペリアル・ホテル」と名称を改め、「オテル・ド・リョーロッパ」の後を継ぐことになった。

1865年10月20日の深夜、宿泊設備もあった「プライマウス・アームズ・ターヴァン」(Plymouth Arms Tavern) に付属する木造家屋より出火したが、これを最初に目撃したのが「オテル・ド・リョーロッパ」の従業員のフランス人であった。しかし、火の回りは早く、石造りのターヴァンや付随するバーはたちまちにして火に包まれ延焼した。このターヴァンの損害額は600ドルにも昇ったが、インやターヴァンと称した宿泊所であっても、ホテルと称した施設よりも遙かに金のかかったものも多くあったのは事実である。

火をだしたターヴァンの近くには、カトリック教会、ホテル、横浜ユナイテッド・クラブなど家屋のかなり密集していた一帯であったが、駆け付けた消防隊の働きにより、居留地では珍しくわずか30分で鎮火することができた。

本稿では火災に関わる記述が多く取り入れられているが、これはホテルや商店の地番をできる限り正確に確認しておきたいと考えたからに他ならない。例えば、先のターヴァンの火災だが、この付近には80番のカトリック教会があり、その近くにユナイテッド・クラブがあったことがこれでわかる。ユナイテッド・クラブは、1863年には海岸通りの5番にあったと大部分の書に記載されているが、ことによったらこのクラブは80番近くにもあったのか、どちらかの記述が誤りではないのか、それとも移転したのかと、いろいろと考察するヒントを提供してくれるからでもある。

タイクーン・ホテル（大君ホテル）

居留地51番は447坪を有する地所で、この内220坪の51番Aがタイクー

ン・ホテルがオープンした場所であった。この地番はかなり出入りの激しいところで、1862年秋にはすでに写真家のソンドーズが一時滞在していたところでもあったから、早い時期から宿泊設備を持つ家屋が建てられていたようである。

1864年3月初旬から5月にかけて、この51番Aには競売業をする一方で洋酒や衣類等を商ったダン商会 (Dunn & Co.) があったが、この年の5月5日にダン夫妻が横浜を離れ、5月20日付で破産宣告が報じられた。その後、この家屋を一部手直しして開いたのが、「タイクーン・ホテル」であった。

「タイクーン・ホテル」(Tycoon Hotel) は1864年6月25日にジェームス・ミクスター (James Mixter) の手でオープンされたが<sup>2,3)</sup>、彼はこの3月まで「横浜ホテル」で働いていた男であった。このホテルにはレストランが併設され、ビリヤード室も付随し、寝室は非常に清潔で整然としたものだったため評判はすこぶるよかった。

ミクスターの客に対する如才のない親切な応対、仕事にかける彼の情熱と事業に対する先取りの真摯な態度から、ホテルは順調に経営され大きく飛躍するものと居留地内では期待されたが、現実には1年たらずで閉業に追い込まれ、1865年7月には「クラレンドン・ホテル」として再出発することになった。

居留地51番はかなり小さな店舗が建てられていた一角で、どうミクスターが勢力的に働きがんでみても、部屋数が10室にも満たないホテルであってみれば、そこにはおのずから限界があった。部屋数の少なさが、今後の経営にどう影響するかと開店早々に報じられもしたが、その懸念が現実のものとなった。

ミクスターは1865年7月4日に横浜からアメリカに去ったことで、このホテル名は居留地から無くなり、代って「クラレンドン・ホテル」と名称を改め1865年7月に再びオープンされていくことになるが、これは1865年

の頃で記述してある。

ミクスターが乗船した船は、「クイーン・オブ・ザ・エイボン」号 (Queen of the Avon) というイギリス国籍の帆船で、日本から300樽のお茶を積載していたが、なにしろ161トンという小型の船であったから、サン・フランシスコには48日もかかった8月22日に到着した。この時期、太平洋を横断する定期郵船はいまだ配船されていなかったため、旅行者はこのような貨物船に便乗させてもらうしか方法がなく、そのためかなりの日数を港で待機しなければならなかった。1865年度に横浜よりサン・フランシスコへ向かった船舶は合計21隻を数えたが、その前年の1864年はわずかに8隻だけであったから、船の確保もまた旅人にとっては大変な苦勞を伴ったのであった。

先の「クイーン・オブ・ザ・エイボン」号には、ミクスターとは別に注目すべきふたりの人物が乗船していた。ひとりには1865年の項で触れることになるシュリーマンで、もうひとりにはフランスの有名なチェロ奏者のデヴァシェ (Alexandre Desvachez) であった。

デヴァシェは、1865年4月24日に居留地32番の「アマチュア劇場」で、この頃に来日中のピアニスト・チゾルム (Marquis Chisholm) やグロッシ (Signor Grossi) の協賛をえて第一回目の演奏会を開いたが、フランス人による演奏会としてはこれが横浜で最初のものであった。彼はサン・フランシスコへ向かう直前に、フランス公使のレオン・ロッシェ (Léon Roches) の前で腕を披露して、公使を大いに感激させたりもした。

1864年暮れに居留地102番にリズレーが「ロイヤル・オリンピック劇場」を建設したこともあって、1865年前半にかけては音楽家がいく人も来日してはかなり活発なコンサート活動をして、横浜居留地に住む人たちを大いに魅了したのであった。

「タイクーン・ホテル」の開業を伝える広告としては、「ジャパン・ヘラルド」のそれとは別に「ジャパン・コマーシャル・ニュース」にも同文の

広告がなされ、1864年8月24日号を翻訳したものが、「日本貿易新聞」(第68号)として『幕末明治新聞全集』(第一巻)に掲載されている。内田弥太郎が訳し、柳河春三の補訳になるものだが、彼らは蕃書調所(後に洋書調所、開成所)の洋学者であったので実に興味ある訳文になっている。若干の誤りがみられるが(誤植と思われる個所もある)、訂正しないで紹介しておきたい。

「タイクン、ホテル

本町通五十一番

諸国陸軍海軍御役人様方を始め、御一同御馴染御客様、御存之料理、此度當横濱港に於て開店候間、引札を以って御知らせ申上候。私店之儀は運上御役所の御近邊にて、座敷も手廣く普請仕、飾り附其外諸道具共奇麗を専ら心掛申候。扱御料理之儀は四季之氣候に随ひ、時々之珍味御好次第差上可申候。猶又奇麗に取立て玉突場も當店の近邊に御座候間、何卒被仰合賑々敷御遊来可被成下候様奉希上候、御勘定の儀は即日現金に御拂被下とも、壹ヶ月分つ、取集御拂被下候共、御都合次第可被成下候。

朝飯		午時	十時
チツヒン	<small>朝食と昼食の間の休息食事</small>	午後	一時
晝飯		同	六時半

葡萄酒、焼酒、碎酒、佛蘭西産リキウル糖漿其外諸品精々入念吟味仕差上申候

一千八百六十四年第七月廿日開店仕候

於横浜 ジャーヌス・ミキストル敬白<sup>24)</sup>

幕末期の洋学者の翻訳になるだけに、実に丁寧な訳文になっている。ここでは、「タイクーン・ホテル」の開店が1864年7月20日と書かれているが、先の新聞広告では6月25日とあり、また6月25日開店を示す記録は他にもあるので、開業日は後者の月日をとってよいであろう。

なお、「ジャパン・ヘラルド」の訳文は「横浜料理屋の引札」と題して「別

段日刊新聞」(1864年9月22日)にも掲載されているが、この方では経営者名をシャナーメス・シキストルとしている。このふたつの広告訳文を比較すると若干の差違がみられる。

#### コマーシャル・ホテル

トーマス・マコーレーが開いた「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」が1864年8月30日に閉鎖されたあと、新しい名前で「コマーシャル・ホテル」が同年9月10日にオープンされると報じられたが、<sup>25)</sup>実際のオープンは10月初旬にずれ込んだ。この遅れは改築などに日数を要したといった面ではなく、新しい経営者の来日の遅れにあったと考えられる。

1864年10月8日付けの「ジャパン・ヘラルド」紙の広告によれば、このホテルは開店されたばかりで、その持ち主はイギリス郵船P. & O.社と長いこと関係があり、東洋における旅行者や居留者の要望に十分に答えられる経験の持ち主だったという。この広告文では人名まで明かにしていないが、この新しい持ち主は後で明かになるP. & O.の郵船で旅客係をしていたカーティス(William Curtis)というイギリス人で、彼が来日したのは10月2日のことだった。

カーティスは本稿でひんばんに登場することになるが、P. & O.の「カディス」号(Cadiz)の旅客係だったらしいので、先の8月3日に同船が入港した機会に、マコーレーとカーティスとの間でホテル譲渡の話合いが持たれたものであろう。

1865年の一時期カーティスはグラックメイヤー(Gustave Glackmeyer)を共同経営者としたことはあったが、1865年6月1日にふたりでの共同経営が解消されたあと、カーティスのみでの運営が1869年まで続いた。「コマーシャル・ホテル」は、ただ単に「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」の後を継いで改称しただけのホテルであったから、その経営は初めから順調といえるものではなかった。

このため、カーティスはホテルを開業して1年後の1865年11月には、ホテルの裏手に屠殺場（屠牛場）を設け、ここで殺した牛肉の販売業をも手懸けるようになった。カーティスの屠殺場は、近くに多くの個人住宅や商会のあった86番の一角で、さらにすぐの裏手にはイギリス教会などのあったところだったから、臭気がなんともがまんがならないとか、極めて不衛生だという不快の意が大勢の人たちより表明されたり、また「ジャパン・パンチ」で叩かれたりしたこともあった。

居留地内には他にも屠殺場があったが、多くの批判もあって後には山手の奥の240番付近にイギリス、ドイツ、アメリカ、オランダ各国の屠牛場が設けられるようになり、その地所は6区で3,836坪もの広大なものであった。

こんな状態の「コマーシャル・ホテル」であってみれば、西欧からの旅行者の目からは、三流ホテルと卑下されるのもやむをえない。1866年1月14日フランス郵船で来日し、長い間横浜に居住したアーサー・ブレント（Arthur Brent）に、「ホテルは三流と<sup>261</sup>いってよいコマーシャル・ホテルが本町通り85番付近にあった他はなにもなかった」と書かれるようになるのもうなずける。

この年の11月、天津でボーリング場などを経営していたトンプソン（Wm. A. Thompson）は、横浜に居住する目的で上海を経由してやってきたが、自分の住居が決まるまでこの「コマーシャル・ホテル」に宿泊した。彼がここに宿をとった数日後に、可愛いがっていたペットの羊が彼の部屋からいなくなった。盗まれたものか、どこかに迷い込んだものか見当がつかず、羊の行方についてなんらかの情報を提供してくれた人には、若干の謝礼金をだすと広告したが、羊までも同伴できるようなホテルだったわけで、今の感覚からはとても想像もできない。

「コマーシャル・ホテル」は経営難にぶつかり、1867年3月9日に身売りされた。しかし、買い手もまた月極めでの借り手もつかないままだったた

め、そのままカーティスの手で経営が続けられていった。丁度このような時期に来日し、このホテルにたまたま泊まることになった人にフランス人・ボーヴォワール伯がいた。

ボーヴォワール伯は、1867年4月21日に東洋航路の旅程を選んで上海を経由して来港したが、この5月25日の便でサン・フランシスコへ向かうまでの約1カ月滞日した。帰国後、彼は『世界一周旅行記』全三巻を書きあげたが、その三巻目の『北京、江戸、サン・フランシスコ』の中で、めったに遭遇しない椿事に巻き込まれたことを、来日そうそうの横浜で体験したと語っている。

P. & O.社の「シンガポール」号 (Singapore) で来日した彼は、復活祭のため居留地80番のフランスのカトリック教会を訪れたあと、宿舎を捜しに街にでた。80番の教会から堀割に向かってほど近い86番に、「コマーシャル・ホテル」と看板をだした木造の二階建ての家を見つけ、そのホテルの「はなはだ質素な部屋」に泊まることに決めた。マコーリーの頃より劇場に改築してみたり、売りにだされたりしたホテルなだけに、ブレントやボーヴォワールの証言をまつまでもなく、この時期には木賃宿に毛が生えた程度のものでしかなかった。この時、ボーヴォワールは次のような事件を体験するようになろうとは夢想だにしなかったのであった。

1867年4月26日午前1時30分頃に、居留地107番のブラウン (S. R. Brown) 宣教師の住いから失火し、たちまちの内にブラウンの木造家屋を火の海に包んだ。幸い、ブラウンと彼の家族は救出されたが、ブラウンの蔵書、とりわけ日本関係の貴重な図書は全て灰燼に帰した。極めて火の手が上がるのが早く、しかもかなりの風が吹いていたこともあって、隣の106番にあったショイヤー宅はもちろん、105番の英国教会を含め、本村通り一帯に延焼するものと危惧されたが、アメリカ、イギリス、日本の消防隊に、フランスなど各国の船員が加わって必死の消火をしたため、ブラウン宅一軒が焼けただけで、他への延焼は免れた。



この火災を目にしたボーヴォワールは、1867年4月26日の手記にこう綴った。少し長い引用になり、また当時の新聞記事と付き合わせてみると若干の喰い違いがみられるが、原文通り紹介してみる。

「1867年4月26日

午前3時、われわれは耳をつんざくばかりの喧騒に目を覚まし跳び起きた。目をこすりながらも、誰しものがすごい明るさに眩惑した。街中に火災が発生したのだ。

通りは車輪と荷車の騒音で一杯になり、かん高い「オハイオ」の声だけがわれわれの耳に届いた。駆け足でかけつけて行くのは日本火消し組で、お互にわれわれの窓の前ですれ違う時は、実に威勢のいい声をかけ合って挨拶を交わしていく（これほどまでこの民族は礼儀正しいのだ）。火消しの身成りといえ、実に日本的、つまり裸同然だ。

われわれは急いで露台へ駆け上がってみると、われわれのバラックから80歩のところ、通りの一角がすっかり火の海に包まれ、われわれの屋根の上にはもう火の粉が振りかかっていた。(一部略) 40度の熱さの中で、大急ぎで必要な品々を一切トランクに詰め込み、われわれのいるバラック小屋にも火が付くようなことになれば、それを持ちだせるように中庭に急いで運びだした。こうしておいて、火元に行ってみた。焼けていたのはある宣教師の家であった。<sup>27)</sup>」

この後で、日本での火消しの服装の異様さに驚きの目を向けたボーヴォワールは、日本の木造家屋などについて描写を続けるのである。

ボーヴォワールは、自分たちの泊まった「コマーシャル・ホテル」と火元の107番のブラウンの家とを80歩のところと書いているが、これは深夜の火災で大きく火の手が上っていたことからすぐ近くと思っただけのことで、実際の距離は、このホテルの裏手にある英国教会を挟んだ前田橋側の

現場までは、よほどの大股でも80歩では行けない。なお、隣のショイヤー宅は水浸しになっただけで済んだが、ここにはショイヤー亡きあと夫人と息子が住んでいた住居があった。

カーティスの経営する「コマーシャル・ホテル」は1869年まで続いたが、この頃に彼は居留地18番に建つ「インターナショナル・ホテル」の開業に専念することとなって、86番の「コマーシャル・ホテル」の方は1年単位の契約で貸しだしていた。

1870年1月の「ジャパン・パンチ」の中の一枚には、なにやらホテルからつかみ出される女性たちが描かれている。同じような光景を描く絵が他にもあるが、どうもいかがわしい日本女性が夜ともなるとたむろすホテルとなっていたようである。

1870年（明治3）に入ると、このホテルは新しい経営者のトンプソン（W. H. Thompson）によって引き継がれ、その営業は継続されていたが、1871年1月になって閉鎖されることになった。

1862年にオープンされた「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」から数えて9年弱のあいだ、いくたの経営難や持ち主の変遷をみながら存続してきた86番の木造二階建てホテルもすっかり老朽化し、女を買えるホテルと公然と人の口にのぼるホテルになり下がっていた。しかし、このホテルの閉鎖の原因は、またしても火災によるものであった。

1871年（明治4）1月5日の夜、「コマーシャル・ホテル」の正面玄関の壁が燃えているのが目撃されたとき、誰しもがすぐに消火できると思っていた。バケツで数杯の水をかけるのに手間どり、消防ポンプが現場に到着した時には、ホテルやボーリング場は完全に炎に包まれていた。幸いこの夜は風がなく、付近の数軒に延焼しただけで、大火にならずに済んだ。

寒い季節になると安心して夜を過ごすことができないといわれたほど、横浜は居留地・日本人街とも火事が実に多かった。このため、各国はそれぞれボランティアによる消防組織を持っていたが必ずしも足並みが揃わず、

しばしば火災を大きくしてしまうこともあった。

「コマーシャル・ホテル」の火災のあと、居留地内の消防組織の見直しが行なわれ、強力な消防団が編成されていただけに、このホテルの火災もそれなりの意義があったことになる。

1871年1月5日の夜、このホテルと道を挟んだすぐ側の「ゲーテ座」で音楽会が催されていた。この音楽会はウートレイ夫人（三代駐日フランス公使・ウートレイの夫人）が、普仏戦争で負傷したフランス兵の慰問のために開いた慈善音楽会で、夫人みずからも出演をしていた。「ゲーテ座」が前年の暮れに開場されたばかりでもあったので、大勢の観客が集まっていたが、「コマーシャル・ホテル」の火災によって音楽会は中断された。

山手公園で演奏会が開かれていた時に居留地内で火災が発生し、観衆の中にいた消防団員が現場に駆けつけた時点ではもう燃え尽きていたといったこともあったが、「ゲーテ座」と「コマーシャル・ホテル」とは目と鼻の距離であったから、観客はすぐに消火に参加したり、火災が拡がるのを防ぐため囲りの家屋の取り壊しに加わったのであった。

なお、ウートレイ夫人による音楽会は1週間後の1月12日にもう一度開かれ、その純益1万7千5百フランがフランスへ送られた。

火災の後、86番は整地され「テンペランス・ホール」(Temperance Hall)が建築されたり、フランス人のシスターたちが住んだバンガローが後に建てられていった。

#### オテル・デ・コロニー

居留地97番の「オテル・ド・リョーロップ」の後を受けて開業したホテルは、「オテル・デ・コロニー」といい、新しい持ち主は上海でコックをしていたラプラス (A. Laplace) とミシェル (Michel) というふたりのフランス人であった。ラプラスの方はある程度まで追求できるが、ミシェルの方は同姓の人物が多いため把握ができない。ただ、このホテルの経営から

手を引いたあと、居留地 166 番でソーダ水やレモネードの製造販売したミシェルと同一人物ではなかったかと推定している。とすれば、明治に入ってパン製造業を始めた人物ということになる。

1864年10月2日上海より横浜にやってきたラプラスは、ミシェルと共にこの11月1日に「オテル・ド・リョーロップ」を「オテル・デ・コロニー」と改称してオープンした。<sup>28)</sup>ところが、開業から3カ月後の1865年2月15日には、80番のカトリック教会の裏手から、155番のイギリス領事館事務室(後のイギリス刑務所)に至る途中の本村通り164番の一角に同じ名称で移転開業した。<sup>29)</sup>

居留地97番より164番へ移転した理由は、さらに便利で広々とした建物へということであったが、先に触れたロスの雑貨店が不振の折であったから、持ち主のロスと経営者のラプラスらとの間にいろいろのごたごたが背後にあって、移転を余儀なくされたものであろう。

1865年(慶応元)2月に居留地164番にオープンされた「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies)は一般の宿泊者を泊めるホテルではなく、月極めの下宿という性格であった。月極め宿泊費が45ドルと非常に高いので、なにか特徴のあるホテルだったと考えたいが、小じんまりとしたビリヤード室があった程度で、これといった目立ったものはない。

45ドルの月極め料金はすぐに30ドルに割り引かれ、夏の期間はアイスクリーム、シャーベット、プディングなどが賞味できるようになって大いに好評を博した。アイスクリームだけを例にとると、バニラ、コーヒー、木いちご、すぐり、ももなどのメニューがあり、好みによってはプロンビエールさえ特注することができただけに、コックの腕の方は確かなものだった。

日本人が初めてアイスクリームを味わったのはこの頃のことらしく、文久3年の遣仏使節池田筑後守一行もフランス郵船の中で賞味している。池田筑後守一行34名は横浜鎖港を命題に、さらに文久3年9月2日(1863.10.14)にフランス陸軍少尉アンリー・カミュ(Henri Camus)が、

攘夷派浪士によって横浜郊外の井土ヶ谷で斬殺されたのを謝罪するため文久3年12月29日(1864.2.6)横浜を出港した。

船中での珍談はたくさんあるが、西洋料理が口に合わず食事に不自由していた時、一行はアイスクリームが食卓にでると、「氷に卵を和し砂糖を加味せし珍物を玉盤に盛り出さし、一匙の甘味得も云はれず」(「欧行記」)と大いに歓喜している。

ところで、「オテル・デ・コロニー」がオープンされる164番の地所は三区轄に別けられ、それぞれが200坪強の敷地で、いずれもフランスに貸し与えられたところであった。1867年8月になると、51番で営業が続けられていたジュール夫人(Euzière Jules)の美容院がこのホテル内に併設され、さらに1869年にはボナ(L. Bonnat)の経営するレストラン「お菓子の城」(Sweetmeat Castle)も開店され、ホテルは一段と充実をみせるようになった。

ボナがここにレストランを開いた段階で、このホテルの所有権はラプラスよりボナに移り、1872年春まで164番のホテルは彼の手で経営されていた。

明治5年2月13日(1872.3.21)より同19日までの「横浜毎日新聞」に、次に示す広告がなされている。この本町通り55番は430坪の地所で、この頃には雑貨商の他に競売業や弁護士事務所などがあったところである。

「御披露奉申上候

私儀是迄百六十四番にて、ホテル渡世罷在候處日増に繁昌仕冥加至極難有仕合奉存候然處此度本町通五十五番へ引移猶右渡世相励御料理の儀ハ極製風味専一に仕座敷ハ勿論諸道具に至迄美を盡し精々下直に相働御働未無之様仕候間猶不相替多少に不限御用向被仰付御引立の程偏に奉願上候何方様迄も仕出し仕候。

本町通五十五番 ホテル館 ボナ」

日本人に書かせたと思われるこの広告は興味ある文章となっているが、ひとつ注目しなければならない点がある。164番から55番へ移転してホテル経営を続けるとここで明記してはいるが、文中のどこにもホテル名は記載されていない点である。

この新聞広告から、明治5年頃に55番に「ボナ・ホテル」があったといく冊もの既刊書で書かれているが、「ホテル館 ボナ」とはボナの経営するホテルの意であって、「ボナ・ホテル」とするわけにはいかない。さらにいえば、ボナがはたして55番でホテルを経営したかどうかは疑問で、その裏付け資料となるものは先の新聞広告しかない。

少なくとも1872年初めには、ボナは18番に開業されていた「インターナショナル・ホテル」の持ち主となっているだけに、55番に移転を報じたあと、カーティスより18番のホテルを共同で経営しようとの意向が示されて、55番のホテルは断念したと考えるべきであろう。確かなことは、55番にホテルがあった形跡は全くないことである。

居留地164番の「オテル・デ・コロニー」は1864年11月1日より1872年3月頃まで存在したが、別の経営者によって同名のホテルが1880年代に入ってからまた登場するようになる。

なお、築地居留地にも「オテル・デ・コロニー」が開かれるが、この方はフランス人のベギュー（L. Bégueux）らの経営になるもので、かつての164番の「オテル・デ・コロニー」のコックたちであった。

164番ホテルの持ち主だったラプラスは1870年に一時フランスに帰国したが、再び来日するとまたもホテル経営に乗りだした。一方、ボナの方は、「グランド・ホテル」や「インターナショナル・ホテル」などいくつものホテルに手をだした人物で、ふたりの動向は先でさらに触れることにする。

1865年6月3日、ドイツ人・ヘンリー・シュリーマン（Henry Schlieman）が上海を經由して横浜にやってきた。彼は帰国した後の1867

年に『今日の中国と日本』(La Chine et le Japon au temps présent) を刊行するようになるが、1865年7月4日に前述したチェロ奏者・デヴァシェらと出港するまでの1カ月日本に滞在した。横浜ではホテルに宿泊したが、そのホテルは「八重樫が群生する庭の中央に建てられていた」と書いている。八重樫の咲き乱れるホテルの名は明記されていないが、1865年6月頃に営業されていたホテルとしては、「横浜ホテル」、「コマーシャル・ホテル」と「オテル・デ・コロニー」しかないのもので、ことによったら164番のホテルだったのではないかと考えられる。

1865年1月の日付けを持つ『クロニクル・アンド・ディレクトリー』には、「ナショナル・イン」(National Inn)と「オリエンタル・イン」(Oriental Inn)のふたつの宿泊所の名がみえ、両者とも1867年版まで掲載されているので、1864年から1866年までこれらの宿泊所は居留地にあったと判断できる。しかしながら、それが居留地のどこにあったのか、規模といった面は皆目見当もつかない。これも無理からぬ話で、5室ほどの宿泊所でさえ「ホテル」と言われた時代に、ホテルより格下の「イン」では船員宿舎の域をでず、旅行客など泊まるはずもなかったろう。本稿では、こういった「イン」や「ターヴァン」(Tavern)、さらに「ハウス」(House)、「コテージ」(Cottage)といった居酒屋または居酒屋兼簡易宿屋の類は、きちっとした宿泊設備を持っていたと判断されたもの以外は記述していない。

1864年に横浜にあったホテル

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」(Royal British Hotel 86番)

「アングロ・サクソン・ホテル」(Anglo-Saxon Hotel 71番)

「オテル・デュ・ジャポン」(Hôtel du Japon 168番)

「オテル・ド・リョーロップ」(Hôtel de l'Europe 97番)

「タイクーン・ホテル」(Tycoon Hotel 51A番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 97,164番)

1865年

ホテルの名称は、この年度12軒を数えたが、「タイクーン・ホテル」が「クラレンドン・ホテル」と名称変更がなされ、「パビヨン」と「ムンツ・ホテル」と「オテル・ド・パリ」は実質的には同じものであったから、前年の5軒に新たに4軒が加わった合計9軒であった。小さなホテルは改廃が激しく、また違った地番に同名のホテルが店開きされたりするようになっていくため、かなりやっかいである。

この年、フランス郵船(Messageries Impériales)が上海・横浜間に定期航路の就航を決定し、その第一船の「デュプレックス」号(Dupleix)が9月7日に横浜に入港し、同13日には上海へ向け出港した。「デュプレックス号上にて」と題するワーグマンの絵にこの頃の様子を描いたものがあるが、人物が限定できないため入港時の模様がどうか決定できない。第一船ではベルトラン夫妻の他5名の船客が横浜で下船した。

1862年から1863年にかけてコレラが流行し、さらに1865年の横浜は天然痘患者が数多く発生し、山手に天然痘病院の設立が具体化していった。性病疾患が多かったのは幕末に限った特徴ではないが、横浜では性病などは病気のうちに入らなく、それに対する羞恥心も予防の念も全くなかった。天保銭2枚で遊べる女郎屋もあったが、遊廓での一夜の料金は2朱から5分だったというからかなりの額といえる。その遊女の三分の一は梅毒持ちだったという報告もある。

マリナーズ・ホーム

1865年3月1日、イギリス人・スキッパー(J. C. Skipper)は居留地123番に「マリナーズ・ホーム」(Mariner's Home)という週・月ぎめの宿泊



所を開設した。<sup>301</sup>スキッパーは1863年11月14日に来日していたにもかかわらず、1年後の1864年12月の段階でも住所が定まらず、手紙の宛名が宣教師・ジョナサン・ゴープル気付けになっているところを見ると、1864年代はしっかりとした定職にはついていなかったものとみえる。

居留地123番は51番や97番と並んで極めて出入りの激しかった地番で、1864年10月にはここにあった家屋が貸しにだされたり、640坪の地所が売りにだされたりしていた。この地番の一角にまず「バンク・エクステンジ・レストラン」(Bank Exchange Restaurant)が1864年10月15日に開かれたが、これを引き継いだのが「マリナーズ・ホーム」で、おそらく4室しかなかったこの家屋で宿泊所を開いたものとみられる。

この程度の規模では自分の生活さえ危く、スキッパーはすぐに蹄鉄業を始めたり、さらに隣地124番でパン屋を開いていたアメリカ人・グッドマン(George W. Goodman)と手を組み、1865年10月16日に地番も同じ123番で牛肉販売業を始めた。グッドマンは横浜で最も早くからパン製造・販売をし、レストラン経営や馬車業にも手をだした男だが、この年の12月1日に彼はこの肉店の経営から手を引き、グッドマン・スキッパー商会は短期間で解消されることになった。このためスキッパーひとりによる肉店の経営と靴の販売が続けられていったが、1866年に入ると経営は行き詰まり、彼はこの3月10日に逃げるようにしてアメリカに去った。

居留地123番の「マリナーズ・ホーム」は、1865年3月から10月にかけての期間その名を留めた宿泊所でしかなかったが、この頃にフランス人のアブリル(P. Avril)の雑貨店や51番より移転してきたアンドリュー(W. P. Andrew)の店がここに開かれていった。

この123番が有名になるのは、1866年に入ってからのもので、ジョージ・マーシャル(George Marshall)、ランガン(William Rangan)ジョージ(Cornelius George)らがここで馬車業を始めたことによってであった。特に、ランガン馬車会社は前田橋近くの123番と東京・築地との間に一日に

2便を相互に走らせ、イギリス公使館関係の書状を運ぶかたわら、一般の手紙の運送も請負ったことなどから、前田橋通りのこれらの馬車屋は繁栄を極めた。

ジョージの馬車には目印として、赤地に白の馬を染め抜いた旗が立てられ、一方のランガン馬車会社の馬車には赤地に黒馬の旗が立てられた。なお、居留地内の有名な馬車屋としては、他にサザーランド馬車会社 (J. W. Sutherland) とカブ馬車会社 (Cobb & Co.) とがあった。

### クラレンドン・ホテル

「タイクーン・ホテル」が閉鎖されたあとの1865年7月1日に、イギリス人・モーリス (Albert Morris) がこのホテルを手直し、一部を増築して「クラレンドン・ホテル」 (Clarendon Hotel) として開業した<sup>3 1)</sup>。しかしながら、開業した51番Aはかなり限られた狭い地所であったから、先にあった「タイクーン・ホテル」を凌駕するというものでなかった。

居留地51番は最も激しい動きをみせた地番で、小さな宿泊所、写真館、理容院、雑貨商などの出入りがひんぱんにみられ、1863年から1867年にかけてのこの地番には17の商会や店舗がみられた。

それでも、「クラレンドン・ホテル」は1866年11月末までここで営業を続けていたが、例の11月26日の大火で焼失してしまった。このため、「クラレンドン・ホテル」は、1週間後の12月5日には、居留地97番で借り手の付かないままであった「インペリアル・ホテル」の後に入って、「クラレンドン・ホテル」の看板を掲げた<sup>3 2)</sup>。したがって「クラレンドン・ホテル」は、1866年には51番と97番の2カ所にあったわけである。しかしながら、97番へ移転開業した「クラレンドン・ホテル」は、1867年4月には「ブリティッシュ・ホテル」となり、経営者も代わっているため、1867年の早い時期に閉鎖されたことになる。この日を限定することはできないまでも、推定させる記録がある。ハンサードが1867年1月15日と18日の両日に渡って公

開オークションを開いた。このオークションで数多くの家具、食卓、応接セット、カーペット、油絵から石鹼、チーズ、ブランデー、ジンといったものまで売り捌かれた。これらの品目を眺めると、どうもホテルで使用していたものではなかったかと思わせる。広告文中に、「家業を断念したある男性の持ち物」と書かれているだけに、この時のオークションの品目は「クラレンドン・ホテル」のものだったとの見方をしておきたい。<sup>33)</sup>

「クラレンドン・ホテル」が1867年中に営業を続けていたとする記録がないのも、1867年1月の段階では閉鎖されていたことを裏付けている。ただ、『クロニクル・アンド・ディレクトリー』の1868年版に、「クラレンドン・ホテル、97番」「ブリティッシュ・ホテル 97番A [D]」と1867年中に97番にふたつのホテルが同時に営業されていたように記載しているが、「ディレクトリー」の記述は1年のずれは珍しいことではなく、少なくとも両ホテルが97番に併設されていたことはなかった。なお、モーリスは1869年に長崎で「グローブ・ホテル」を経営した。

#### オリエンタル・ホテル

1865年5月1日、早くから横浜に居留して煙草などの雑貨を扱っていたドイツ人・パトー (William Patow) はフーチェ (A. Feucht) と手を組んで、ユナイテッド・サービス・クラブのあった裏手の99番に、主にドイツ・ビールを提供する飲食店「ビアー・アンド・コンサート・ホール」(Beer and Concert Hall)<sup>34)</sup>を開いた。この洒落た名のビール店は、8月頃に「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel) と名を変え宿泊もできるようにしたが、部屋数は6室ほどのホテルであったからすぐに左前になり、9月30日には閉業する有様であった。<sup>35)</sup>したがって、パトーたちが経営した「オリエンタル・ホテル」は、せいぜい2カ月たらずの存在でしかなかったわけである。

先にでてきた「オリエンタル・イン」や、1871年の項にでてくる「オリ

エンタル・ホテル」とこのホテルはなんら関係がない。

ホテルを閉鎖したパトーは、フーシェとの共同経営を解消し、この年の10月にかつて所有していた162番の地所や二階建て家屋を処分して、新しい商売に備えた。その後、パトーはかねて住んでいた132番（一時期85番や183番に居住）で、主に土地を扱う不動産業に手をだして、1874年まで商売を続けるようになった。

### パビヨン

1864年3月6日、英船「カークコネル」(Kirkconnell)号が上海より横浜に入港したが、この船にリズレー (Richard R. Risley) と彼の率いる曲芸師一座10人が乗船していた。このリズレー一座こそ、当時の数種の錦絵に「中天竺舶来之軽業」として描かれるサーカス一座で、日本で最も早く興行されたサーカスであった。

リズレー一座の興行は、特に馬の上での軽業がみられることもあって、大変な評判を呼んだ。1864年3月28日の初日は、居留地内の空地でテント掛けの興行だったが、フランス、アメリカなどの公使、領事をはじめ、外国人およそ250人、日本人およそ200人が集まるという大人気であった。

3月28日の初公演には、これも上海から来港したばかりの女優・ゴードン (Lizzie Gordon) と踊り子・セリト (Petite Cerito) のふたりが出演して華を添えた。この日の入場料は、日本人には1等席で2分、2等席が1分という料金であったから、<sup>36)</sup> なかなかのものであった。

テント掛けの興行場所は新しく埋め立てられた新田埋立地——つまり新沼沢地居留地——だったらしいが、その正確な位置は今となっては限定しようがない。しかし、1863年12月に新居留地103番の地所424坪が売られ、後に102番の地所134坪を含めてリズレーの所有となるところだけに、居留地102番、103番だった可能性がないでもない。

最初のうちこそリズレー一座のサーカスは好評を博していたが、日がた

つにつれて同じ出し物のため飽きられ客足は遠のき、5月上旬に興行を打ったあと一座は横浜で解散した。この後から、リズレーの面目躍如たる活動が始まることになった。

1864年5月に一座を解散したリズレーは、サーカスで使っていた八頭の馬を元手に、この6月初めには居留地102番で貸し馬車業を始め、行く行くはここで調教場を経営し乗馬教室をも開く計画を持った。一般に、サーカス興行が不振に終わったため、その損害の穴埋めにリズレーが牛乳店を開いたようにいわれているが、牛乳店の方はまだまだ先の1866年に入ってから開業であった。また、さまざまな栄枯盛衰、人生の浮き沈みをなめてきたリズレーといえども、金をなくしては居留地102番と103番の地所を手に入れるはずもなかったのであるから、少なくともサーカス興行で損失があったとは考え難いところがある。

当時のサーカスは横浜でのみ興行が許され、江戸では許されなかったもので、人口が限られた横浜では、しかも同じ出し物とあつては客足が減少していくのは当然であった。したがって、リズレーは2カ月たらずの内にサーカスを断念し、貸し馬車業、酒場、劇場経営と次から次に新しい商売を手懸けていくようになったわけである。

1864年6月初めに居留地102番で貸し馬車業を始めたリズレーは、隣地103番の家屋を自宅として使用していた。これは11月16日に彼の自宅(103番)から、両蓋の金側懐中時計が盗まれたと盗難届けがだされていることでわかる。また、102番の貸し馬車業の方も早々に諦め、1864年秋には「飛馬」(Flying Horse)なる酒場を経営しだした。

1864年8月17日に芸能人・イーマンズ(E. Yeamans)夫妻が来港したが、リズレーは彼らと手を組んで102番に小さな劇場(Amphitheatre)を建築する計画を立て、この11月初めにその意向を発表した。その最初の公演は12月2日に一般に公開されたが、「選び抜かれた夜」として出し物を厳選しただけあつて、これまでのどの公演より秀れたものと大好評を博した。

この劇場の規模は地所からみても小さなものであったが、名前の方は「ロイヤル・オリンピック劇場」(Royal Olympic Theatre)と大層な名を持つ劇場であった。1864年12月2日に居留地102番でこけら落としをした「ロイヤル・オリンピック劇場」こそ、横浜居留地に建った最初の劇場で、以後リズレーが1866年12月5日に日本のサーカス一座・高野広八一行18名を連れてサン・フランシスコに向う時まで、一時閉鎖された時期もあったが、ここで芝居、音楽会、手品などがひんぱんに公演されたのであった。「ロイヤル・オリンピック劇場」の最盛期は1865年2月から4月にかけてのことだったが、この間の3月6日にリズレーはなんと天津へ出港している。

リズレーの天津行きの目的は、ここで氷を買い求めて横浜で氷屋を開くためであったが、5月3日に彼がチャータした米船「J. W. シーヴァー」号(J. W. Seaver)に氷を積み込んで横浜に戻ってきた。

横浜に戻ったリズレーは5月15日に前田橋に近い112番に氷屋を開業し、同時に「ロイヤル・オリンピック劇場」側の酒場を止めてアイスクリーム店を102番に開いた。氷屋もアイスクリーム店も、横浜ではリズレーの店をもって嚆矢としただけに、商売の方はまず順調なすべり出しをみせた。これに気をよくしたりズレーは、先に売りにだされていた居留地103番のビリヤード台を所有するレストラン「コテージ」(The Cottage)を買い取り、居留地102番と103番とで多角経営に乗りだした。つまり、「ロイヤル・オリンピック劇場」とアイスクリーム店、それにお客用の各種の馬の飼育場と総合雑貨店の経営に加えて、プライベートなホテルまで開業した。これらの各施設を称して「パビヨン」といい、7月10日をもってオープンしたものの、1カ月後の8月14日には、この102番と103番の全設備が公開オークションにかけられるはめになった。<sup>37)</sup>したがって、ホテル「パビヨン」は1865年7月から8月にかけての1カ月だけ開かれていただけに過ぎず、リズレーの描く総合歓楽街の夢は早くも崩れた。

氷屋の営業に専念するため、競売人・ハンサードに依頼して、8月14日に112番の氷屋だけを残して全財産を売りに出したものの、結局買い手が付かないままで終わった。リズレーは氷屋を開業した頃より、牛乳店をも併業したい意図も持っていて、近い将来には牛を飼育し、安い牛乳を提供し、同時に横浜製チーズとバターの製造・販売の計画を持っていた。このため、牛の購入費と船賃の捻出がどうしても必要となり、先の諸施設の放棄という形で現われたのであった。

リズレーは1865年9月1日に氷屋を今の二倍に広げ、翌1866年にはカリフォルニア産の牛から搾った牛乳をふんだんに提供する計画を横浜に住む居留民に告げ、開業資金の援助を求めた。そのためにまず彼はストックのある氷の20パーセント割り引きに踏み切り、さらにこの9月下旬には彼の所有した馬とポニーを担保に資金作りに乗りだした。

リズレーはサーカス一座を連れて来港する前に、ゴールド・ラッシュのカリフォルニアにおり、さらにペンシルヴァニアで牛を中心とした牧場を経営していただけに、牛の飼育にはこの時の経験が大いにものをいうはずと自信たっぷりであった。

多くの人の援助を受けて2千ドルほどの金を懐にしたリズレーは、1865年10月8日サン・フランシスコへ向うアメリカのスクーター船「アイダ・D・ロジャーズ」号 (Ida D. Rogers) に乗り太平洋を渡った。38日を費やしてサン・フランシスコに11月15日に到着したりズレーは、ここに約1カ月滞在して自ら牛を捜し歩いた。

カリフォルニア産の立派な6頭の牝牛と数頭の仔牛を購入したりズレーは、行きと同じ「アイダ・D・ロジャーズ」号に牛と共に乗り込んだ。1865年12月13日のことである。この船は1860年以降1866年まで最も多く横浜とサン・フランシスコ間を往復した船だが、決して定期船というものではなかった。1867年に入ると、パシフィック・メール社 (Pacific Mail Steam Ship Company, 以下P.M.S.S.と略) の大型郵船が、この航路に配船さ

れるようになったため、同号の就航はみられなくなった。

わずか200トンの「アイダ・D・ロジャーズ」号は途中で暴風に遭遇し、前進することもままならない日も続き、結局70日以上もかかって1866年2月22日にやっとのことで横浜入港をはたした。太平洋航路の所要日数はP.M.S.S.の船であれば20日前後のものであったから、この船は3倍以上の日数を要したわけである。このため、牛に飲ます水不足が生じ、リズレーの重要な飯の種となる牛たちは死の危機に曝されていた。この時の模様はブラック（**John Riddie Black**）の『ヤング・ジャパン』に詳しいので、ここでは重複を避けることにする（ブラックはこの船の入港を2月24日としているが、2月22日が正しい）。

リズレーがこのとき連れてきた牛は牝牛6頭だったが、別の船にも数頭を積み込んだと当時の新聞に報じられているので、実際にはもう少し頭数が多かったようである。1865年の段階では、夢のまた夢と居留民に陰げ口をたたかれたリズレーではあったが、ミルクはもちろんチーズやバターの製造もここで現実的なものとなった。1866年4月にみられるリズレーの牛乳店の開業を伝える広告をみると、彼の大きいなる感激が伝わってくる。

一壇25セントで牛乳を売りだしたリズレーは腰の落ち着くまもなく、4月に入るとすぐに、夏場に備えて天津へまたも氷の買い付けにでかけ、6月下旬まで横浜を留守にした。このような店主の不在があっては、せっかく順調に行きそうだった牛乳と氷の店「アイス・ハウス」も完全に軌道に乗せることもできず、まして「ロイヤル・オリンピック劇場」にいたっては休業状態がなおも続き、いつの間にか103番の家屋は人手に渡ってしまった。この頃のリズレーの姿を的確に描いたワーグマンの絵があるが（「**The Japan Punch**」1866.8）、牝牛が死にいかにも困惑した苦悶の表情をみせるリズレーではある。

1866年（慶応2）4月、居留地68番にオランダ人のヘクト（**Noordhoek Hegt**）は劇場の設備を有する新しい家屋を建てたが、ここで4月12日に来



港したバーチ夫妻 (**Birch**) は5回の興行を行った。その3回目の公演に当たる5月9日はパークス英公使夫妻が出席する華やいだものだったが、この際アンコールに答えてバーチは「傷心のミルクマン」(**Broken Hearted Milkman**) を歌い彼の当り曲となった。この曲名とリズレーとの胸中とを掛け合せたのが先の絵であった。

生来、どこか一カ所に定住して商売をするには全く性に合わなかったこのボヘミアンは、今度は昔の職業を思い出してか日本の曲芸一座を欧米に紹介しようとした。リズレーはかつてアメリカ領事館で郵便係などをしてきたバンクス (**Edward Banks**) と手を組み、江戸で評判だった曲芸・手妻師たち一行18名を引き連れて、1866年12月5日に横浜港を後にした。

日本人の海外渡航が赦されるようになったこの年、パスポート番号1番より18番までを手にした日本の曲芸一座は、足芸・梯子技を得意とする浜碇定吉、手妻・自動人形に技倆をみせる隈田川浪五郎、独楽回しの松井菊次郎らを含む高野広八一行18名で、女性が3人同行していた。一行はアメリカはもとよりフランス、スペインなどで興行をうっては、彼の地の人たちを驚嘆させたが、この一行より3日早い1866年12月2日に、もうひとつの曲芸一座が海を渡った。松井源水一座9名であった。

高野広八一座はサン・フランシスコへ英国船で向かったのに対し、松井源水一座は香港を経由する東洋航路でフランスに赴いたが、彼らこそ日本の曲芸・奇術を欧米でみせた最初の日本人たちであった。この頃、他にも鉄割福松一座、早竹虎吉一座、さらに鳥潟小三吉といった曲芸師が相次いで渡航するが、海外で最も早く金儲けに精をだしたのが曲芸師たちであったのは興味深い。

松井源水一座9名の内には、彼の妻や娘たち5名の女性が含まれていたが、幕府の許しを得てパスポートを所持し、海外に出かけていった日本人女性はこういう曲芸師たちの妻や娘たちであった。海外に進出した最初の女性は、パリ万博の際に瑞穂屋・清水卯三郎が出店した茶屋にでて、立ち

い振る舞いを披露した柳橋は松葉屋の芸者・サト、スミ、カネの3人であったともいわれているが、彼女たちの出国は1867年1月20日であったから、曲芸師一座よりも遅い。因に、3人の芸者のパスポート番号は47、48、49番であり、隈田川浪五郎の妻・登和が2番、松井源水の妻・春が20番であった。

横浜居留地でのサーカスがリズレー一座が最初なら、日本人による曲芸・手品の技を居留地で最初に披露したのは浅吉や浪五郎らで、1864年8月のブラックのバンガローであった。これをみたりズレーは、彼の経営する「パビヨン」が危機に瀕し、さらに牛を購入のためサン・フランシスコへ向かう直前の1865年9月29日に、「ロイヤル・オリンピック劇場」の再開を記念して、浪五郎らをこの劇場に出演させた。この時点ではまだリズレーも、1年後に「うかれ蝶」や独楽の妙技をみせる日本人芸人たちを引き連れて、欧米への旅にでることになるとは予想だにしていなかった。

1866年12月5日に横浜を出港したりズレーは、再び日本に戻った形跡はない。最後まで彼が残っていた居留地112番の「アイス・ハウス」はこの12月11日に競売にかけられ、また居留地最初の劇場「ロイヤル・オリンピック劇場」もこのあとすぐに売りに出されてしまった。なお、日本人で最初に牛乳の搾り方を覚えたのは前田留吉で、前田橋の側で最初は雇われていたというから、リズレーの牛乳店は正に前田橋のすぐ側にあったので、おそらく両者はぶつかるものと考えられる。

ただし、前田留吉が牛乳の搾り方を習って、牛乳屋を始めるようになったのは、会津戊辰戦争で関係のあったスネル (E. Schnel) の影響によるものだと、「横浜貿易新聞」などに古老の話を基にして書かれている。これを受けて『横浜市史稿』(産業編) や多くのものの始めに関する本にも、同様の記述がみられる。しかし、スネル兄弟が牛飼いをしていたとする記録は他に知られてなく、またスネルが前田橋側で牛を飼い屠殺場を開いてい

たことを証明するものはみあたらない。

前田橋から本町通りに向かって左側は、1860年代初めにあっては沼沢地であり、右手の前田橋側もゴープル、ショイヤー、ブラウンらの家屋が建てられる106番、107番、110番で、スネルがこの近くに住んだとする裏付けはどうしてもできない。1862年代には居留地44番に彼らの名はみられるものの、1860年頃に18・17歳のヘンリー、エドワルドのスネル兄弟が、本当に前田橋の近くの整地もされていない地所で牛乳搾りをしていたかは疑問視しておきたい。

横浜に住む日本人が牛乳に慣れ親しむようになるのは明治初年のことだが、この頃はまだ体によい薬のような扱いであった。薬として用いたのは牛乳ばかりでなく牛肉もそうであったから、庶民の口にはなかなか入らなかったとみえる。母乳不足の母親が牛乳で子供を育てるのが普及するのは1870年（明治3）頃のこと、牛乳で育てられた子供が数多く現われるのはこの年以降のことであった。

#### マンツ・ホテル

氷屋に専念するためリズレーは、彼の「パビヨン」を1865年8月に売りに出したが、結局は買い手がつかないままの状態が9月下旬まで続いた。この「パビヨン」を借り受けて、ホテル業を始めたのがマンツであった。マンツの名前ははっきりしないが、イギリス人・フィリップ・マンツ（Philip M. Muntz）と思われ、彼は1865年7月18日に来日した。

マンツは居留地103番に「マンツ・ホテル」を開いたが、この年の9月28日の段階ではいまだリズレーの所有になっているだけに、早くともこのホテルの開業は10月に入ってからのことだったはずである。

ところが、10月に開業されたばかりの「マンツ・ホテル」は、経営者のマンツが10月16日に日本を去るという事態になって、<sup>383</sup> またも借手を探さなければならないはめに至った。したがって、103番の「マンツ・ホテ

ル」はわずか半月間の存在でしかなかった。この「マンツ・ホテル」の後に入るのが、次に述べる「オテル・ド・パリ」であった。

#### オテル・ド・パリ

かつて上海のバリヤー街で洋装店を開き、1864年初めに来日したホワイト夫人 (**Mme White**) が、居留地 103 番の新しい所有者となった。ここの家屋には、「マンツ・ホテル」で使用した家具・調度品はそのまま残されたので、すぐにもホテルとして開業できる設備は整っていた。

ホワイト夫人は、1865年11月6日にこの地番に「オテル・ド・パリ」(**Hôtel de Paris**) を開いたが、リズレーの「パビヨン」<sup>39)</sup> で記述したように、ホテルというよりむしろ下宿屋といった雰囲気のものであったから、夫人は翌1866年5月初旬に103番の隣接地である97番に移転し、かつて「オテル・ド・リョーロップ」のあった家屋に「インペリアル・ホテル」を開いた。103番から97番への移転の背後には、リズレーのごたごたがあつてのことだったろう。

居留地 103 番は、1865年7月から1866年4月末にかけて、「パビヨン」、  
「マンツ・ホテル」、  
「オテル・ド・パリ」と3つのホテルが名称を変えて存在したが、これらはいずれも短期間の開業でしかなかった上に、快適なホテルにはほど遠いものであったから、旅行者の手記にでてくることもなく、また居留地に永年住んだ古老たちの回想にも登場しないのも無理はない。なお、1900年代に入ってから、179番に「オテル・ド・パリ」がオープンされるが、この間この名称を持つホテルはなかった。

#### ブリティッシュ・ホテル

イギリス人・モス (**Henry Moss**) は、1865年9月1日に居留地 129 番に「ブリティッシュ・ホテル」<sup>40)</sup> を開いた。このホテルは、彼の経営していた飲食店「ブリティッシュ・エンパイヤ」(**British Empire**) を改良したもので

あったため、「ブリティッシュ・エンパイヤ・ホテル」とも呼ばれた。ビリヤード台一台を備えただけの木造家屋であったから、モスのいう「第一級の設備」どころか、居留地にあった他の多くのホテルと同様に、火を付けるとたちまちにして燃え尽きるといったものであった。

1866年12月9日、「ブリティッシュ・ホテル」の食堂から火災が発生した。横浜はもちろん江戸も火事の非常に多い町だが、このホテルの火災は、11月下旬の大火災から2週間の間に起きた3度目の火事であったことと、急激に火の手が上がったことで、またも11月26日の大火災「豚屋火事」の二の舞になるかと居留民を震え上がらせたほどのものだった。

居留地129番は富士山通りに面し、周囲には小さな居酒屋などのバラックが立ち並んだ場所であったから、火災発生と同時にフランス水兵を中心に多勢の人たちが現場に駆けつけ消火に当たった。居留地の消火活動になみなみならない努力を続けたオランダ人・ヘクトの新しい消防ポンプもいち早く現場に到着したが、あまりにも火の回りが早く、「ブリティッシュ・ホテル」を救うことはできず、木造ホテルは10分たらずの内に焼け落ちた。

火災原因はストーブの過熱だったが、木造家屋の安普請のホテルであったから、たちまちのうちにすさまじい勢いで燃え上ったのも当然であった。

この火災の後、モスはホワイト夫人が健康上の理由で経営を断念した「インペリアル・ホテル」、それに続く「クラレンドン・ホテル」を一部手直しして、この97番に再び「ブリティッシュ・ホテル」を1867年4月2日に開業した。<sup>41)</sup>したがって、同じ経営者による「ブリティッシュ・ホテル」は居留地129番と97番とにあったわけである。

しかし、97番の「ブリティッシュ・ホテル」は1867年度中に閉鎖され、モスは欧州・アメリカへ旅立った。彼は1868年夏に日本に戻ると、居留地44番に「ジャパン・ホテル」を新築して、またもホテル業に手をだすようになる。「ジャパン・ホテル」に関しては、1870年の項で記載をしておいた。その後の97番には、「フェニックス・ホテル」が開業していった。

居留地97番のホテルの変遷は実に複雑なので、年度順に整理すると次のようになる。

「オテル・ド・リョーロップ」	1864. 6. 25
「オテル・デ・コロニー」	1864. 11. 1
「インペリアル・ホテル」	1866. 5. (2)
「クラレンドン・ホテル」	1866. 12. 5
「ブリティッシュ・ホテル」	1867. 4. 2
「フェニックス・ホテル」	1869. — —

1864年11月1日に97番に開業した「オテル・デ・コロニー」は、翌年の2月15日に居留地164番に移転したので、1865年2月15日から1866年5月にかけて再び「オテル・ド・リョーロップ」が営業した可能性があり、この点は既に記述した通りである。「ダイレクトリー」を参照すると97番Aとか97番Dの地番が書かれているため混乱しがちだが、年度順に並べてみると、同じ地番にさまざまな名称を持つホテルが順次開店していったことがわかる。

1865年に横浜にあったホテル

- 「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)
- 「タイクーン・ホテル」(Tycoon Hotel 51A番)
- 「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86番)
- 「オテル・ド・リョーロップ」(Hôtel de l'Europe 97番)
- 「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164番)
- 「マリナーズ・ホーム」(Mariner's Home 123番)
- 「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 51A番)
- 「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 99番)
- 「パビヨン」(Pavillon 102番)
- 「マンツ・ホテル」(Muntz Hotel 103番)

「オテル・ド・パリ」(Hôtel de Paris 103 番)

「ブリティッシュ・ホテル」(British Hotel 129 番)

1866 年

1865 年にあったホテルのなん軒かは、1866 年の 11 月に発生した大火災によって焼失し、横浜居留地で最も古く数々の逸話を残した「横浜ホテル」も灰燼に帰した。

この年の暮れに「ベルリン・ホテル」が新規オープンされたが、その直後に火災によって焼上したため、この年度に新しく開店したホテルは実質的には一軒もなかったとあってよい。それだけに、前年に較べると大火災という事故があったもののホテル数は減少をみせ、居留地におけるホテル経営は頭打ちといった様相をみせている。新築されたホテルは「ベルリン・ホテル」一軒だけだったが、他に二軒の新しい名称のホテルが現われた。「インペリアル・ホテル」と「ヤング・ホテル」がそれだが、いずれも古い店舗の名前を代えたものにすぎなかった。

1865 年秋よりフランス郵船による横浜・マルセイユ間の定期航路が開設されたことにより、蚕種や絹が飛躍的に輸出される年度である。

社会・政治面に目を転じると、強力な軍事力と政治力をバックに、イギリスは幕府にさまざまな交渉を持ちかけては苦境に追い込む年度である。「英国政府派遣の極東の権力者を苦しめる蚊」と題するワーグマンの絵は、イギリス公使・パークス (Harry Parks) を巨大な蚊に見立てたものだが、彼は 1865 年 12 月に妻とふたりの子供を迎えに上海に行き 25 日に横浜に戻った。中国の高官を刺して飛来するパークス蚊に、恐れおののく日本の権力者は蚊帳の中で震えている図である。

インペリアル・ホテル

居留地 103 番の「オテル・ド・パリ」を経営していたホワイト夫人は、

1866年（慶応2）5月初旬に97番の旧「オテル・ド・リョーロップ」の後に移転し、これを「インペリアル・ホテル」(Imperial Hotel)と改称した<sup>42)</sup>。このホテルの新聞広告は1866年5月2日より約半年に渡って掲載されたが、5月2日の分は「新広告」の欄にあるので、この日のオープンとみなしてよいだろう。

軍人相手を目的としてこのホテルをオープンしたホワイト夫人であったが、健康が優れず、また新しく埋め立てられた湿地帯になじめなかったため離日の決意を固め、ホテルを売りだすことにした。オープンしてわずか3カ月目の1866年9月8日のことだった。しかし、この時には買い手も借り手もつかず、ホテル名のみがそのまま11月まで残った。11月6日までこのホテル名は新聞で確認することができるが、9月以降の営業は中断していたものとみなされる。

1866年11月26日の大火で、居留地51番の「クラレンドン・ホテル」を焼かれたモーリスは、火災の後に買い手のつかなかった「インペリアル・ホテル」を手に入れ、この年の12月5日より97番のホテルを「クラレンドン・ホテル」として開業した。しかし、このホテルも極く短期間で閉鎖され、新しいホテルが開かれていった。

#### ベルリン・ホテル

1866年12月に開店されたばかりの「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel)は木造二階建てのやや大き目のホテルで、ドイツ人・メツェナー (W. Metzner) によって居留地128番に新築されたが、「ブリティッシュ・ホテル」の項で記述したように、この12月9日に129番のこのホテルよりでた火災により、「ベルリン・ホテル」はもらい火を受け、たちまちのうちに灰燼に帰した<sup>43)</sup>。

このため、メツェナーは1867年に改めて同番地にホテルを再建し、名前も同じ「ベルリン・ホテル」とした。1867年4月2日のフレイ商会 (H.



J. Frey & Co.) の広告によれば、「ベルリン・ホテル」の隣りとしているだけに、早い時期に再び営業が始められていたことになる。このホテルは1873年まで存続したが、1870年に入ると経営者がハイド (J. Heid) やロット (H. Lotz) に代替わりとなったため、1870年から「ノース・ジャーマン・ホテル」と呼称されるようになった。ただし、「ディレクトリー」によっては、1873年当時も「ベルリン・ホテル」と記載した版もある。

再建後のホテルがどの程度の規模であったかの記録はないが、1865年12月に売りにだされた時の居留地128番は428坪の敷地であったので、かなり大きなものであったろう。少なくとも、類焼した時の二階家屋より小さいということはなかったと思われる。

「ベルリン・ホテル」の経営から手を引いたメツチェナーは119番に移住すると、1872・1873年代はここで馬車屋 (German Livery Stable) を開いていた。1872年8月のある早朝、彼は木のはじけるような異様な物音に気付く、その音のする方に近づいてみると、ひとりの日本人が藁やかんなくずに火を付け、数台の荷馬車を燃やそうとしているところだった。メツチェナーは用心のため手にしていた太い薪まきで相手の男の腰に一撃を与え、次の一撃で腕の骨を打碎いたが、巧みに逃げられてしまった。薄明りでみた男の顔は、かつて彼が別当として雇っていたらしい日本人だと思われたが、確証もないまま訴えでることもできずに終わった。

生麦事件に例をとるまでもなく、幕末時に来日した外国人には横暴な者が少なくなかったから、雇い主と雇われた日本人との間でのトラブルはたえなかった。本稿では、日本人使用人に殺害されたイギリス人雇い主の実例を、もっと先のところで書くことになる。

#### ヤング・ホテル

1866年11月下旬に居留地81番Cに、「オールド・ブラウン・ジャグ」 (Old Brown Jug) という下宿がアメリカ人・ハーレイ (Jeo Harley) によって

開かれたが、この下宿の宿泊設備を整え、同人により1866年12月21日「ヤング・ホテル」(Young Hotel)として開店の運びとなった。<sup>44)</sup> ホテルといえばきこえはいいが、いわゆる簡易宿泊所であったから、「オールド・ブラウン・ジャグ・イン」などと呼ばれもし、ビリヤード1時間50セント、宿泊料は月極めで30ドルだった。

「ヤング・ホテル」がいつ頃まで続いたかはっきりしないが、1867年4月の広告をみると再び元の下宿屋の名称になっているので、極く短期間しか存在しなかったことになる。居留地81番は1867年代には小さな飲食店や宿屋が固まってあった一角で、カーニンハム夫人の経営する「スタグ・イン」などもこの地番にあった。なお、ハーレイはこの下宿を他人に譲り、後日136番で別の酒場兼下宿の経営をするようになっていった。

1866年に横浜にあったホテル

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86番)

「オテル・ド・リョーロップ」(Hôtel de l'Europe 97番)

「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 51A番, 97番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164番)

「オテル・ド・パリ」(Hôtel de Paris 103番)

「ブリティッシュ・ホテル」(British Hotel 129番)

「インペリアル・ホテル」(Imperial Hotel 97番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128番)

「ヤング・ホテル」(Young Hotel 81C番)

1867年

この年二軒の新しいホテルがお目見えしたが、相変わらず酒場兼宿屋といった小さなもので、いつ開業していつ閉業したのかさえはっきりしない

ホテルである。1867年にあったホテルの顔ぶれを眺めると、三流といわれた「コマーシャル・ホテル」が最も格上なだけに、この頃に横浜にきてホテルを捜した旅行者はほとんど困惑したことであろう。

1867年1月10日徳川慶喜が第15代将軍に就任し、同30日に孝明天皇の崩御、さらに翌2月13日に睦仁天皇（明治天皇）の踐祚、11月9日の大政奉還と大きな歴史の転換を経験した波乱の年であった。

このような変遷にあって、この年度に来日した15名の第一次陸軍フランス教師団、一方パリ万博に列席した慶喜の弟・昭武一行は大きな影響を蒙るようになった。なお、ナポレオンより慶喜への贈物としてアラブ馬20頭がもたらされたのが、この年の5月29日であった。

#### グローブ・ホテル

1867年1月12日、「グローブ・ホテル」(Globe Hotel)は81番Aに開業されたが、この地番の81番Cには前年の暮れに開店した「ヤング・ホテル」<sup>45)</sup>があり、また81番Bにはカーニンハム夫人(Mme Cunnigham)の経営する下宿「スタッグ・イン」(Stag Inn)が店を開くといったように、居留地81番はちょっとしたホテル・ラッシュであった。

居留地81番は、最初フランスに貸し与えられた1,400坪を越す広大な地所であったが、1867年代はこういった小さなホテル、食堂、洋服店などがひしめくようになっていた。1866年にフランス人のピッケ(E. Piquet)が、この地番にあった家屋、事務室、倉庫などを貸しだしたことがあったので、これらを改造して建てたホテルだったと思われる。

それでも、「グローブ・ホテル」には食堂と喫茶室が含まれ、ビリヤード室や理髪室も付随した木造二階建てのものだったから、一応ホテルとしての機能は備わっていたことになる。

「グローブ・ホテル」の経営者はドモネイ(George Domoney)だったが、彼の名前は1866年後半に調査し、1867年初めに刊行された『チャイナ・

ディレクトリー』の索引頁に、ホテル名を記載していないがホテル・キーパーとして掲載されているので、もっと早い時期にどこかでホテル経営に携わっていた可能性もある。

それにしても、横浜で最初のカトリック教会（天主堂）が1862年以降この隣地80番に建造されており、その付近にこのような雑多な宿屋や酒場が数多く店開きするようになるのには驚きを禁じえない。もっとも、これは礼拝帰りの客を当てこんでの商売だったのであろう。

「グローブ・ホテル」の閉業は明確ではないが、ドモネイは1868年夏頃に「ベイ・ビュー・ホテル」を別の地番で開くようになるので、この頃の閉店だったはずである。「江湖新聞」6号（明治元年4月12日）に、このホテルに泥棒が入り、捕えてみると女だったとする記事があるが、そこでは「ゴローブホテルといえる旅店にドモニーと云人止宿せし…」と書かれている。この記事を参考にすれば、「グローブ・ホテル」は少なくとも1868年6月までは開業されていたことになる。

これまで刊行されたホテル史に関するなん冊もの書で、「ゴローブ・ホテル」が慶応3年（1867）に海岸通りに新規開業されたとしているが、「ゴローブ」は「グローブ」が正しく、またその位置にしても海岸通りではなく、97番に近い81番の本村通りに近いところと訂正しなければならない。これらホテル史に関するものは、『明治事物起源』や『日本ホテル略史』などからの孫引きが多く、そこでの誤記がそのまま誤ったままで引用されていることが多い。

ドモネイが新しく開くホテルは、1868年の項に記述してある。

#### コスモポリタン・ホテル

居留地133番は351坪の地所で、1866年5月にはケニー（D. Kenny）の船道具店やフィッチャー（Herman Fichter）の樽屋などがあった。この一角の152坪の地所にクローセン（Peter Claussen）のやや大きな二階建て

の家屋が1867年初旬にあった。クローセンはこの家屋を貸したいと思いつながら、ついに借り手もみつからなかったため、自らこの二階建て木造家屋を「コスモポリタン・ホテル」として、1867年7月25日にオープンした。<sup>46)</sup> このホテルは新築されたものでなく、従来あった八室を含む家屋を改築し、それにベランダと若干の新しい施設を備えただけのものであったが、ホテルは開業とほぼ同時に売りにだされた。

1867年8月15日、居留地133番Aの地所152坪とそこに建つホテルとして使われている家屋は4千ドルで売るむねの広告がだされた。<sup>47)</sup> したがって、「コスモポリタン・ホテル」は1867年7月25日から8月中旬までの短期間しか存在しなかったことになる。

ホテルの持ち主クローセンは、1867年夏に居留地136番のフォン・デル・ポルデルの肉屋・仲買店で働いたりしていたが、先のホテルは売却することができなかつたので、細々ながらも経営されていた形跡がある。

1868年の五稜郭の戦いに際し、榎本武揚に組したフランス人軍人・商人が10名いた。この内の2名にニコールとコラッシュという海軍下士官の若者がいたが、彼ら2名は1868年11月28日にそれまで乗っていた仏軍艦から脱走し、11月30日に横浜より北国へ向かうプロシアの貨物船に乗って箱館を目指した。

この脱走兵2人に対する追跡がなされ、11月28日と翌29日に隠れていたとみなされるホテルが捜査された。このホテルは「コスモポリタン・ホテル」だったらしい記述もあるが、1867年8月に売りにだしていたホテルを、さらに1年後まで開いていたかは疑問が残るといえそうである。

1872年1月にクローセンは同じ地番で「ユニオン・サロン」(Union Saloon)を開き、さらにこの店舗がまたホテルとなって登場することになるが、この過程は1878年の項で触れることになる。また、「コスモポリタン・ホテル」が136番に開かれるようになるが、これも後述する。

ブリティッシュ・ホテル (97 番)

1865 年の「ブリティッシュ・ホテル」の項を参照されたい。

1867 年に横浜にあったホテル

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86 番)

「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 97 番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164 番)

「ブリティッシュ・ホテル」(British Hotel 97 番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128 番)

「ヤング・ホテル」(Young Hotel 81C 番)

「グローブ・ホテル」(Globe Hotel 81A 番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 133 番)

1868 年

この年度、居留地にあったホテルは 8 軒を数えているが、「グローブ・ホテル」や「コスモポリタン・ホテル」がなくなり、代わって「ベイ・ビュー・ホテル」や本格的なホテル「インターナショナル・ホテル」が開業した。

政治的な面で眺めると、幕府の崩壊は急激に速度を増し、鳥羽・伏見の戦い、榎本武揚やフランス人・ブリュネ (J. Brunet) らによる箱館・五稜郭の占領、会津藩の降伏と混乱の年であった。

1868 年 8 月 (慶応 4 年 7 月)、江戸に約 1 年の歳月をかけて建築していた「築地ホテル」が完成した。本館木造 2 階建て、中央に 4 階の尖塔を持つ本格的なホテルで、部屋数 103 室を有する広大なものであった。一泊食事付き料金は 3 ドルだったが、最初の内はもの珍しさも手助って繁栄した。しかし、築地居留地が横浜居留地のように栄えることなく伸び悩んだため、政府は民間に 7 万両で払下げたことにより、半官半民の形で経営されてきたホテルは、これ以降ホテル建設を請け負った清水喜助らに引き継がれた。

1872年(明治5)1月、和田倉門の元会津藩邸跡より失火した大火により、この日開店したばかりの「築地精養軒ホテル」などと共に「築地ホテル」も焼上した。なお、築地居留地にこの頃あったホテルとしては、いずれも外国人の経営になるものだが、「江戸ホテル」(Yedo Hotel)と「植民地ホテル」(Hôtel des Colonies)があった。

この年の夏頃に、横浜山手の一角にビリヤード台を有し食事も可能な「ベル・ビュー・ハウス」という宿泊所が開かれている。この山手は一般に海岸通りなどで働く人たちの住宅地であったが、長期滞在者の下宿や今でいう塾なども開かれるようになった。

「インターナショナル・ホテル」の持ち主となるカーティスは、この年自分の経営してきた「コマーシャル・ホテル」を横浜最古のホテルと広告している。

#### ベイ・ビュー・ホテル

居留地81番の広い地所は、本町通りと本村通りとに囲まれたところだったが、「グローブ・ホテル」は97番の「ブリティッシュ・ホテル」側の本村通りに面したところにあった。1867年後半になると、81番の地所は小さく分割され貸しだされたこともあって、先に述べたホテルや食堂の他に、中国人の経営する靴屋、洋品店、細工師など10店あまりもあった。

場所としては決して悪いところではなかったが、81番の「グローブ・ホテル」の経営者ドモネイはさらに広い場所でのホテル経営を考え、プラマー(Alfred Plummer)と手を組み水町通り37番に移って、ここに「ベイ・ビュー・ホテル」(Bay View Hotel)を開いた。<sup>48)</sup> オープンの日は不明だが、1868年夏頃と判断している。ドモネイは1868年8月より翌年の1月末まで横浜を留守にしヨーロッパ滞在をしているだけに、横浜を発つ前に新しいホテルを開業し、経営面はプラマーに任せたとの見方ができる。

居留地37番は1864年以降ハンサードの「ジャパン・ヘラルド」社が

あって、これが85番に移転した後にホテルが開かれているので、新築したホテルではなく新聞社を改造しただけのものだったであろう。それでも、途中で「横浜ホテル」と名称変更をしたことはあったが、1873年まで存続したホテルなだけに、一応ホテルとしての機能は備わっていたものとみえる。

「ベイ・ビュー・ホテル」のふたりの経営者ドモネイとプラマーは、1年ほどでこのホテルの経営を放棄し、1869年10月には居留地17番で肉屋を開いていたかつての仲間ヘンダーソン・ウェスト (Henderson & West) の後釜に入り、ふたりは肉屋を始めた。このドモネイらの17番の肉屋は、以降1884年(明治17)まで続くことになる。

1869年10月29日、ふたりの女性が横浜で下船した。彼女たちは長崎で「ベル・ビュー・ホテル」(Belle Vue Hôtel)を運営していたグリーン夫人(Mrs. M. E. Green)とアンダーソン夫人(Mrs. Anderson)だったが、この女性たちが「ベイ・ビュー・ホテル」(「横浜ホテル」)の新しい持ち主となっていった。

1869年11月4日付けで掲載した新聞広告で、<sup>49)</sup>グリーン夫人はドモネイよりこのホテルを譲り受けたことを記録しているので、この日が彼女たちによるオープンの日だったであろう。1868年夏頃に開かれた「ベイ・ビュー・ホテル」は、わずか1年余りその名を留めたにすぎなかった。なお、グリーン夫人は1870年初めには、長崎の「コマーシャル・ホテル」や横浜の「グランド・ホテル」に関係している。

#### ホテル・ド・フランス

「ホテル・ド・フランス」(Hôtel de France)は、後にあちこちの地番でホテルやパンションを運営するジャレット夫人(Julien Giaretto)によって31番に開業された。フランス語と英語とによる新聞広告には開業日を伝える日付はないが、<sup>50)</sup>他に掲載された広告などと比較してみると1868年8月



頃のオープンとみなされる。この広告では、昼食と夕食の時間だけを記しているだけで、宿泊に関してはなんら触れていない。

ジャレット夫人は1870年初頭に「マリーン・ホテル」を41番に開くようになったため、「オテル・ド・フランス」はなくなり、代って31番のホテルはラービヌにより「セントラル・ホテル」と改称され経営されていた。したがって、「オテル・ド・フランス」は最大でも1年数カ月の存在でしかなく、「セントラル・ホテル」で記述するような小さなものだった。

#### インターナショナル・ホテル

居留地18番は518坪の地所で、ロス・バーバー商会 (Ross, Barber & Co.) が1868年に隣りの19番に移転したあそこを整地し直し、ウィリアム・カーティス (W. Curtis) はここに新しいホテルを建設させた。二階建て石造りの本格的なホテルで、茶箱広重といわれた二代広重・喜齊立祥の「横濱海岸通十八番異人旅宿之図」や「ファー・イースト」紙の<sup>51)</sup>写真で、当時の「インターナショナル・ホテル」の瀟洒な景観を偲ぶことができる。

1868年夏頃に開業されたこのホテルの経営者カーティスは、海岸通りに位置するこのホテルでは港の景観を楽しめ、日本で最も上等なビリヤード室を併設していると<sup>52)</sup>宣伝している。

1872年1月に「オテル・デ・コロニー」の所有者であったボナが共同経営者となり、彼の「スイートミート・キャスル」(Sweetmeat Castle) レストランを「インターナショナル・ホテル」内に移転した。しかし、ボナは新しいホテルの経営を手懸けるようになったため、カーティスとボナとの共同経営はまもなく解消されてしまった。

「インターナショナル・ホテル」は1868年から1873年にかけては、少なくとも横浜を代表する最大のホテルであったが、このホテルの開業直後に宿をとったドイツの女性・ウェップネル (Margaretha Weppner) が1875年に刊行した『北極星と南十字星』(“The Northern Star and the South-

ern Cross”)を参考にして、パット・バーはみてきたことのように書いている。

「彼女(ミス・ウェップネル)はまぎれもなく横浜の二流のホテルと思われるあるホテルの写真を撮っている。薄汚れた家具, きしみそうな立て付けの悪いドアと窓, 旧式のバス・ルーム, 騒々しいビリヤード室, さらになによりも, 酒と魚とすえた臭とかび臭い醤油の臭が漂っている。ホテルの客の大半は男たちで, 彼らはなにかを待っているようだった。出船・入船を待つ者, 友人や妻を待ち受ける者, なにか奇跡<sup>53)</sup>の起こるのを待つ者だった。」

マルガレータ・ウェップネルは世界一周をもくろみ, 1869年(明治2)11月30日にサン・フランシスコを經由し, P.M.S.S.の「アメリカ」号で横浜に到着した。彼女は外人客用のホテルであった「インターナショナル・ホテル」や東京では「江戸ホテル」に宿泊したが, 女性のひとり旅ということではいろいろと誘惑が多く, 男たちの視線をあびては落ち着かずに眠れぬ夜を過ごしたこともあったようである。2年に渡る世界一周旅行記が、『北極星と南十字星』と題し二巻本として刊行されたのは1875年のことだった。

この書を参考にしたパット・バーの書には、『夷狄来航』の他に『鹿鳴館』(“The Deer Cry Pavilion”)や後に記述するイザベラ・バードに関する書などがあるが, 先の描写が仮に「インターナショナル・ホテル」であったとすれば, あまりにも想像がたくまし過ぎるといわなければならないだろう。

1934年生まれのバーの目からすれば, 二流の安ホテルと映ったのであろうが, 開業間もなくしかも広重の版画「横濱海岸通十八番異人旅宿之図」にも取り上げられてもいるように, 横浜名所のホテルの調度品がすすけていたり, 醤油などのすえた臭がするようだと表現するのは, はたしてどんなものだろう。いずれにしろ, 1873年に「グランド・ホテル」がオープンさ

れるまでは、このホテルが横浜で最高のホテルであった。

1874年7月1日より「インターナショナル・ホテル」の経営は、カーティスよりパーヴス (G. T. M. Purvis) に代わった。<sup>54)</sup>パーヴスはイギリス人の退役海軍大佐で、1870年春に来日し日本政府が横浜港の船舶の管理のために横浜港湾長に任命した人物だったが、アメリカ公使がこの任命に強く反対し、アメリカの船舶に対してはその管理を認めなかったため、1年後には彼の処遇が宙に浮いた。波間に漂うパーヴスの姿が、この頃のワーグマンの絵に描かれている。

ワーグマンの描くパーヴス像は10点を越すが、1874年にパーヴスがこのホテルに乗りだした時には、一軒おいた隣の20番には「グランド・ホテル」が新規開業したばかりで、両ホテルの激しい反目・葛藤があった。この折りの様子を巧みに描いたワーグマンの諷刺画が残されている。<sup>55)</sup>

パーヴスが経営して約1カ月後の8月初旬には、エリオット (G. W. Elliott) が新たにホテル内に美容室を開き、さらにバーの充実も図った。特にバーの方は、この9月初めよりアメリカからやってきた腕のよいバーテンダーを雇い入れ、そこで提供される多種多彩のカクテルは居留地で評判になった。44番の「ジャパン・ホテル」もバーの経営に力を入れたホテルだったが、両ホテルがファンシー・ドリンクで競ったのがこの時期であった。

1874年11月1日、パーヴスは「インターナショナル・ホテル」の名称を「オクシデンタル・ホテル」と代えた。<sup>56)</sup>パーヴスはなにかと話題の多い人物だったので、「オクシデンタル・ホテル」をもじり、「アクシデンタル・ホテル」(災いホテル)と陰口をたたかれたりもしたのであった。

「オクシデンタル・ホテル」と名称を代えたあとの1875年7月に、パーヴスはこのホテル経営から手を引いたため、再び元の持ち主だったカーティスとカロール商会 (J. D. Carroll & Co.) の事務員であったスミス (E. S. Smith) が経営に参加し、1875年7月10日よりまたしても「インター

ナショナル・ホテル」と改めて再び開業されることになった。<sup>57)</sup>

しかしながら、ふたりによる共同経営はこの年の12月28日に解消され、カーティスに代わってヘンリック (W. H. Henriques) がパートナーとして1876年1月1日より経営に参加した。<sup>58)</sup>この頃横浜では「グランド・ホテル」を凌ぐホテルただだけに料金も高く一泊で3ドル、月極め二食付きで最低料金が60ドルと1876年代は高かった。この時より、後述するミュラール兄弟が料理人として加わり、フランス料理に腕の冴をみせたのであった。

パーヴスのホテル経営はわずか1年であったが、彼は一般の旅行者よりむしろ長期宿泊者のために便をはかっていたので、今ならさしずめアパート経営みたいなものということになる。パーヴスはその後は山手に住まい、ある電信会社の代理店などをしていていたが、1880年2月12日に山手68番の自宅で永眠し、山手外人墓地に葬むられた。まだ53歳という働き盛りであった。

1877年に入ると、E. S. スミスとヘンリックの共同経営する「インターナショナル・ホテル」は不振に落ち入り、この年の4月12日、さらに同18日の二度に渡って公開の競売にかけられることになった。<sup>59)</sup>

518坪の敷地に、ふたつの食堂やビリヤード室を含め32室のベッド数を有するこのホテルは、すぐには買い手がつかず、さらにスミスがホテル経営から手を引きたいという意向をみせたりすることもあるが、1877年暮れまでホテルは今にも潰れそうな状況にあった。

それでも「インターナショナル・ホテル」は営業は続けられ、この8月4日には夏に向けての「アイス・ハウス」(Ice house) も併設されたりもした。この頃に泊まっていた人には、話題の多いブラキストンらがいたが、「インターナショナル・ホテル」と「グランド・ホテル」の宿泊者は、当時の日刊紙「ジャパン・カゼット」にその氏名が掲載されたほどであったから、横浜を代表する二大ホテルだったわけである。

こんな危なかしい時期、このホテルにたまたま泊まることになった日本人がいた。徳川家達は1877年6月11日に竹村謹吾、山本安三郎、河田熙<sup>ひろし</sup>と大久保業<sup>なる</sup>（三郎の弟）を随員にイギリス留学のため横浜を出航する予定になっていた。ところが、当日は非常に烈しい強風が吹き荒れたため、乗船予定のフランス郵船「ヴォルガ」号（Volga）の出航は13日まで延期されることになった。この折、徳川家達らが急遽泊まることになったのが、この「インターナショナル・ホテル」であった。

1877年暮れになり、やっとホテルも落ち着きをみせた。これまで横浜で仲買商・競売業を営んでいたフレッチャー（C. A. Fletcher）が支配人として乗り込み、1878年1月1日より経営参加したからであった。<sup>60)</sup>これに安心したものか、E. S. スミスはこの1月14日にアメリカに向かったが、これはどうやら結婚話しが持ち上がっての一時帰国だったようである。

ところが、フレッチャーの「インターナショナル・ホテル」はすぐに暗礁に乗り上げてしまい、またも先のヘンリックが所有者となって3月1日より経営するといったように、かなり危険な経営状態がまたも続いた。

しかしながら、9月6日にスミスが夫人同伴でアメリカより戻ると、彼はスウィフト（T. S. Swift）と手を組んでスミス・スウィフト商会を設立して、このホテルの再建に努めたのであった。一方、持ち主のヘンリックの方は、この年の11月19日にホテル経営を譲歩したため、以降スミスらふたりによる共同経営が続けられるようになった。

スミス夫妻が9月6日に横浜に到着した時、サン・フランシスコより同船した人に、ブリッジス（E. S. Bridges）というイギリス人の陸軍中佐がいた。彼は帰国後の1879年に『六カ月間世界一周』（“Round the World in Six Months”）という書を刊行したが、行く先々で泊まったホテル名を記録しているために実に楽しめる。

ブリッジスが宿泊した横浜でのホテルは、「インターナショナル・ホテル」であった。太平洋を横断中に、たまたまスミスと顔を合わせ、横浜の

ホテルは「インターナショナル」がよいと勧められたのかも知れない。ところが、ブリッジェスのこのホテルの感想は、食事は普通、ゲームは陳腐、ベッドは固く寝つかれない、新しい体験はなにもないとにべもなく、やたら蚊の多いことを印象に語っている。翌日、彼は「横浜クラブ」で食事をして美味しい料理にめぐり会い、このクラブに宿をとらなかったことをしきりに嘆くのであった。

9月20日に横浜から神戸に向ったブリッジェスは、神戸でグリーン夫人の「兵庫ホテル」に泊まり、長崎では「ベル・ビュー・ホテル」(Belle Vue Hôtel)に宿をとったが、これらのホテルにも特別の感想はない。サン・フランシスコで泊まった4階建ての412室を誇る「オキシデンタル・ホテル」での豪華なディナーが脳裏からなかなか離れなかったようである。

1879年暮れよりスミス・スウィフトによる経営は順調な軌道にのり、1880年6月よりかつて187番の「オテル・デュ・リュニヴェール」の経営者であったカンドーベールを、ポーラン・ミュラール (Paulin Muraour) に代えてシェフとして迎え、さらに施設を充実させると1881年1月1日よりホテル名を「ウィンザー・ハウス」(Winsor House) と改めた。<sup>6 1)</sup>

1881年1月1日に名称を変えて開業された「ウィンザー・ハウス」は、この年に隣地19番の敷地を入手して、ここを広大な庭園とすると同時に、広い風通しのよい食堂をこの7月1日に併設し、一階と二階に幅3メートルを越すベランダを設け、さらに明るく快適な読書室と広々としたビリヤード室も備え、ホテルの充実を目ざしたのであった。二階建て石造りのこのホテルの写真が残されているが、<sup>6 2)</sup> 威風堂々としたものである。

1883年に「ウィンザー・ハウス」の経営はスミスからウルフ (L. Wolf) へ代替わりをし、彼は1886年までこのハウスの持ち主であった。ウルフの経営する「ウィンザー・ハウス」は、1886年2月7日の午前4時頃に、隣地17番のファサリ商会よりの出火によって、わずか30分ほどで全焼した。隣りの19番は庭園と空き地になっていたため、20番の「グランド・ホテ

ル」には被害はなかった。この火災のあと、「ウィンザー・ハウス」は「グランド・ホテル」に統合され、ウルフは後者のホテル所有者のひとりとなった。

過去に刊行された書に、「ウィンザー・ハウス」の開業年を慶応年間だとする記述がみられたりもするがこれは明らかに誤りで、このハウスの開業年は1881年1月1日で、終りが1886年2月であった。

話は横道に入るが、横浜外人墓地の入り口から右側に少し下った一角にイギリス人・ベビル (R. M. Bevill) の墓がある。ベビルは長い間P.M.S.S.の各郵船のパーサーをしていた人物で、1874年9月1日に彼の職場であった「オレゴニアン」号 (Oregonian) を下船し、別の郵船を待つ間この「インターナショナル・ホテル」に泊まっていた。当時のホテルには、こういった船員たちが大勢滞在していたが、事故は9月8日早朝に起きた。

9月8日朝、ホテルのボーイがベビルの部屋に入ってみると、血に染ったベビルがベッドに横たわっているのを発見した。まだ息があったが、急を聞いて駆けつけた医者が到着する少し前に息を引きとった。

彼のベッドの傍らにはモルヒネを含んだ硫酸の入った小壺が半分ほど空になっており、体にはおよそ40カ所にも上るナイフの刺し傷が認められた。さらに、使用はされなかったが小型ピストル・デリンジャーもすぐ側で発見されたため、すぐ覚悟の上での自殺と断定された。それでも、この夕刻には検死が行なわれ、次で山手の墓地に埋葬されたのであった。

P.M.S.S.の郵船は、サン・フランシスコ・上海間に配船されていたが、乗組員によっては横浜で乗り換わり、ベビルは専ら横浜・上海間の航路で就業していたので、この時はサン・フランシスコから入港する船待ちの状況にあった。

ホテルとは別に、横浜には多くのインやターヴァンがあったが、これは一般の旅行者とは別に、職を求めてやってきた労働者が働き口が見つかるまで部屋を提供したり、船の乗り換えで少し長い間滞在する人たちのため

に、安い値段で貸すといったものであったから、インやターヴァン、さらに小ホテルなどの存在理由があったのである。

なお、ベビルの自殺は、パーヴスがこのホテルの持ち主となって最初の不祥事であった。

1868年に横浜にあったホテル

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128番)

「グローブ・ホテル」(Globe Hotel 81A番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 133番)

「ベイ・ビュー・ホテル」(Bay View Hotel 37番)

「オテル・ド・フランス」(Hôtel de France 31番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

1869年

この年度いくつかの新しい名称のホテルが開業されているが、本格的なホテルとしては海岸通りに前年の夏新築された「インターナショナル・ホテル」一軒だけで、他のホテルは開業・閉業日さえ明確に把握できないもので、簡易宿泊所といった感じのものばかりである。

イギリスに次いで、フランスとアメリカが横浜に定期船を就航させるようになった後だけに、ホテルの需要は大きかったはずだが、この年になっても小規模の持ち主が転々と代わるホテルが大半であった。

1869年6月10日(明治2.5.1)箱館戦争に荷担したフランス人10名の内9名がフランス艦に収容され、そのすぐ後で賊軍が死守した五稜郭は遂に陥落し、榎本釜次郎は降伏を申しでた。蝦夷地が北海道と被称、11カ国に分割されたのはこの年の9月20日(明治2.8.15)であった。



横浜ホテル (居留地 37 番)

「ベイ・ビュー・ホテル」の経営が1869年11月にグリーン夫人の手に渡ったあと、彼女はこのホテルを「横浜ホテル」と改めた。居留地 37 番の「横浜ホテル」は1873年1月まで続くが、グリーン夫人は1870年には手を引き、以降ほぼ1年単位でスコット (M. Scotte), トンプソン (W. H. Thompson), スtrandバーグ夫人 (Alice Strandberg) と代替わりをしているだけに、このホテルは1年契約で貸されていたホテルだった形跡がみられ、ここに登場した4人の人物は、横浜ばかりでなく東京、兵庫、長崎でのホテル経営と関わりをもっている人たちである。

グリーン夫人は1870年初めに、居留地 20 番の「グランド・ホテル」の経営をまかされる機会に「横浜ホテル」を去った。グリーン夫人のあと経営に努めたスコットは、すぐに40番の「ブルックリン・ホテル」に乗り替わり、彼もまた「横浜ホテル」を去った。

トンプソンは、かつて居留地 86 番で長い間「コマーシャル・ホテル」を経営してきたカーティスの後を継いで、このホテルの営業を手懸けていたが、1871年に「横浜ホテル」に乗りだし、翌年には東京のホテルへとといったように目まぐるしくホテルを代えた。

Strandberg夫人にしても同様に、トンプソンの後釜として「横浜ホテル」を経営したが、これを火災で失ったために、別の地番でホテル業を始めるようになった。

1868年に「ベイ・ビュー・ホテル」として新たに開業されたこのホテルは、1873年には「横浜ホテル」として姿を消した。しかし、1874年にはまたも「横浜ホテル」が居留地 108 番に開かれるようになるので、この名称には大いに留意する必要がある。つまり、明治10年前だけでも、三つの「横浜ホテル」があったのである。

1. 居留地 70 番 「横浜ホテル」 1860～1866
2. 居留地 37 番 「横浜ホテル」 1869～1873

### 3. 居留地108番 「横浜ホテル」 1874～1877

これら三つのホテルのうち、居留地70番のものが一応本格的で、あとのふたつは長期滞在者用に提供された下宿みたいなものであったようだ。

居留地37番のホテルは、「横浜ホテル」となった1869年から1873年の4年間に4人の人たちに代替わりしているが、このようなのは他に例がない。まずホテルの持ち主と経営者とは別人だったことから、このような目まぐるしい変わり方をしたのであろう。

トンプソン (W. H. Thompson) の名前があちこちにでてくるので、簡単な足取りを追ってみることにするが、ファースト・ネームはウィリアムと思われる。彼は1869年末頃「コマーシャル・ホテル」の経営者となったが、このホテルの持ち主はW. カーティスであったから、トンプソンは年契約でこのホテルの経営をまかされていたようである。

1871年1月に「コマーシャル・ホテル」が火災で焼けたあと、彼は居留地37番の「横浜ホテル」の経営者となり、1872年から1874年にかけては東京の「江戸ホテル」(Yedo Hotel)を経営していた。この年の夏に再び横浜に戻ると、居留地101番で「ミント」(The Mint)なる飲食店を開業したが、この店にしても1875年中には閉ざされてしまった。W. H. トンプソンの足取りは、一年単位の契約で次々とホテルからホテルへと渡り歩いていた様子を見せている。

なお、1870年に居留地121番に「オールド・クラブ・ホテル」があり、その経営者がトンプソン夫人 (Mrs. T. Thompson) であった。この夫人が、W. H. トンプソンと関わりがあった人物かどうかは全く調べがつかない。

1864年の「コマーシャル・ホテル」の項で、宿泊者としてW. A. トンプソンの名前を記述したが、W. A. トンプソンの方は横浜居留地123番のランガン馬車会社で働き、後に兵庫居留地で馬車屋を開いた人物で、ホテルのトンプソンとは関係がないようである。

W. H. トンプソンの後を受け継いで、37番の「横浜ホテル」の経営者

となったのはストラントバーグ夫人であったが、彼女の時代にこのホテルは火災によって焼失した。1873年（明治6）1月28日の午前3時を少し回った頃、ホテルのランプ室とおぼしき部屋からでた火は、たちまちにしてこの木造二階ホテルを炎に包み、ホテルとこれに付随して個人的な下宿として使用していた平屋建ての小家屋などを含め、37番は完全に焼け落ちた。<sup>63)</sup>

この日の午前2時を少し過ぎたころすでに火が燻っているのが確認されながら、自力で消火できるものと思い、消防隊にも近隣にも知らせなかったため被害を大きなものにしてしまった。この火災により、経営者のストラントバーグ夫人は二階正面のベランダから飛び下り肋骨数本を折り、顔や頭に火傷を負った。また、宿泊者のひとりに「ヤンツェ」号 (Yangtze) の機関士をしていたアイルランド系のアメリカ人・ジョゼフ・ハイド (J. Hyde) がいたが、彼は前夜に酒を飲んで就寝したため煙に巻かれたものらしく、焼け跡から焼死体で発見された。この時の遺体は、頭と両手・両足がなく胴体だけだったというから、想像を絶する火勢だったのであろう。

「横浜ホテル」から一軒おいた39番にはヘボン邸や教会があり、さらに道を一本挟んだ水町通りの先には「インターナショナル・ホテル」があり、これらの家屋も一時は危険な状態に陥ったが、幸い間に建っていた倉庫などが障壁となり、38番の家屋を延焼しただけで火の手を免れることができた。

全焼した「横浜ホテル」には保険がかけられていなかったが、これに負けずストラントバーグ夫人は再出発したのであった。火災時の宿泊者には焼死したハイドの他に、やはり機関士のバーンズ (Wm. Burns) がいたが、彼もまたベランダから飛び下りて重傷を負った。木造二階建てベランダを有するこのホテルは、側に平屋建ての家屋を併設したものであったが、月極めによる下宿の方に力を注いだホテルであった。

「横浜ホテル」の焼け落ちた前日の1月27日の夜に、火災を知らせる警

報が鳴った。この火事は本牧の農家より出火したものであったが、火災の発生したとき幸いに風向きが変わって数軒の農家を焼いただけに過んだ。これが鎮火してやれやれと安堵した横浜の人たちは、今度は海の彼方に真っ赤に焼けた空をみることになった。東京での大火事であった。

東京府下における火災は、明治7年(1874年)に警視廳が置かれるようになってから詳細に記録されるようになったが、先の1873年1月27日の火災は500~600戸が焼失したとだけ記載されている。因に、東京市下の火災件数は明治7年より同30年までで9,166件を数え、焼失戸数は98,751戸という数に昇った。中でも、明治12年12月26日の日本橋の福地某より出火した火災は10,613戸を焼き尽し、24名もの死者を出すという明治火災中で最悪のもので、激しい西北風にあおられた火災は30時間にも渡って荒れ狂ったのだった。

#### セントラル・ホテル (31番)

居留地31番の一角で「セントラル・ホテル」(Central Hotel)がラビヌ(M. Labine)によって1869年暮れか1870年初めに経営されるようになるが、この地番にはかつてフランス領事館があり、これに関わりのあったファン・デル・フォルデル(Th. Van del Volder)が1866年8月にこの地番にあった8室の部屋数のある家屋を貸しにだしたことがあったので、まずこの家屋が「オテル・ド・フランス」として開業され、さらに「セントラル・ホテル」と改称したものとみなされる。

1871年に入ると経営者は、フォード(Benjamin T. Ford)に代わったが、1872年中にはもう消滅してしまったホテルなだけに、1869年や1870年代に開店する多くの小ホテルは、調査にばかり時間がとられ、ホテル名以外の事項はまず浮かんでこない。この点は、当該人物の横浜到着や出港の船のリストから探り、さらに時期を限定したいものと考えているが、こういった商売人たちは二・三等船客が多かったために、乗船名簿から割り出

すこともままならない。

1871年代に52番で船具用品の販売をしていたトーマス (Joseph Thomas) は、1872年に入ると31番に移転し、ここで反物・小間物類を扱う雑貨店を開いた。この店舗は1873年12月にストーブの煙突の過熱から全焼し、9,000ドルに昇る損害をだしたが、木造家屋であったため午前8時の火災にもかかわらず救うことができなかった。時代、地番、木造家屋といった面からみて、トーマスの雑貨店は「セントラル・ホテル」の後釜に入店したものとみられる。

もっとも、1866年暮れから1867年にかけての31番の推移を調べてみると、ソマーの理髪店、マルシャンドの靴店、シグリストの雑貨店などが次々と店を開いていった地番で、「セントラル・ホテル」があった1870年代には7店舗も数えたので、トーマスの店がかつてのホテルだったと断定できるわけではない。

なお、1870年版の『ジャパン・ヘラルド・ディレクトリー』ではホテルの持ち主をラビン (M. Labim) と記載しているが、ラビーヌが正しいのではないかと思われる。ラビンの表記した記録は他にみあたらないのに対し、ラビーヌとするものは少なくとも複数がある。例えば、1873年にラビーヌ夫人は居留地136番で簡易宿泊所を開いていた資料があり、「セントラル・ホテル」の最初の経営者と同一人物ではなかったのかと臭わせる。

居留地136番にホテルが現われるのは1889年まで待たなければならないが、ここにはインやターヴァンと名乗る宿泊所は無数にあった地番であった。

#### フェニックス・ホテル

居留地97番にあったモスの経営する「ブリティッシュ・ホテル」は、1867年4月に「クラレンドン・ホテル」を改称して開業されたものの、この年の内に閉業されてしまった。しばらく空家となっていたこのホテルは、

1869年に「フェニックス・ホテル」(Phoenix Hotel)として再開された。

「フェニックス・ホテル」は古くから横浜で商売を営んでいたイギリス人のマルコーム (William Alfred Malcolm) とブラック (Black) によって経営されることになったが、次年度には閉鎖されたので、極く短期間その名を留めたにすぎなかった。マルコームの追跡はある程度までできるが、彼がホテル業に手をだしたのはあとにも先にもこの時しかなかった。

「フェニックス・ホテル」が1870年中に姿を消した理由は、おそらく火災に原因があったものと思われる。1869年10月から1871年1月までの間で居留地で起きた火災として、70番のショイヤー商会 (Ernest Schoyer) や86番の「コマーシャル・ホテル」と共に、81番や97番が焼けたとする記録がある。97番の火災は1870年3月2日の夜に発生したもので、その夜はかなりの風が吹いていたため、本村通り一帯に延焼するのではないかと懸念されたが、イギリスやフランスの消火隊の現場への到着が早かったこともあって中国人の店舗など数軒の家屋を焼いただけですんだ。この時、このホテルも極めて危険な状況にあり、水浸しの憂き目に遇った。<sup>64)</sup>

その後の97番には小さな酒場や簡易宿泊所などがなん軒も開業されるようになるが、ホテルとしては1889年に「ファルコン・ホテル」がオープンされるまでの約20年間この地番にホテルが開かれることはなかった。

居留地97番のホテルの変遷や改廃は実にめまぐるしいものがあるので、1865年の「ブリティッシュ・ホテル」の項で1870年以前の動きはまとめておいた。1869年から1871年初めにかけての一時期だけ存在した「フェニックス・ホテル」なだけに、新聞広告などが見当たらないのもうなずける。

1869年に横浜にあったホテル

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 86番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128番)

「ベイ・ビュー・ホテル」(Bay View Hotel 37番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 37番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 31番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「フェニックス・ホテル」(Phoenix Hotel 97番)

1870年

この年度における横浜居留地のホテル数は前年に較べると倍に増えているが、同じ地番で名称を代えたホテルが2軒あるので、その実数は13軒であった。新規開業のホテルとしては「ジャパン・ホテル」だけがやや大手で、あとは規模の小さいものであった。

1873年に本格的なホテル「グランド・ホテル」が開かれるが、この年にこのホテルの前身にあたる「グランド・ホテル」の開業がみられる。

ジャパン・ホテル

1867年に97番の「ブリティッシュ・ホテル」の経営から手をひいてアメリカへ旅立ったヘンリー・モスは、1868年7月に再び横浜に戻ると、またもホテル業に乗りだした。その地番は、かつて武器の輸入などで怪商といわれたオランダ人・スネル (Edward Schnell) の住いのあった居留地44番で、ホテル名を「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel) といった。開業日を伝える正確な資料がないため推定するしかないが、1870年の早い時期だったであろう。

香港で刊行された1870年度版の『クロニクル・アンド・ディレクトリー』では、まだこのホテル名は記載されていないが、1870年3月に横浜で刊行されたディレクトリーでは44番にこのホテル名と持ち主のモスとバーテンの名前が記載されている。<sup>6.5)</sup> この2冊のディレクトリーから判断すれば、1869年暮れのオープンの可能性も捨てきれないが、1870年初頭とみなすの

が妥当であろう。

居留地 44 番は 227 坪の地所で、波止場から本町通りと交差する一角で、これまでもたびたび触れてきた 51 番の裏手に当たる。「ジャパン・ホテル」はこの地所の大半を占めるホテルで、ビリヤード室とバーを有するかなり大きな木造二階家屋だった。部屋数などその規模のほどは不明だが、少なくとも 20 室に近い部屋があったと思われる。

比較としては適切とはいいがたいが、1866 年年 12 月の火災でモスの所有した 129 番の「ブリティシエ・ホテル」がわずか 10 分たらずの内に燃え尽きたのに対し、44 番の「ジャパン・ホテル」の方は出火から鎮火するまでに 1 時間半もかかったからである。また、ホテルには 1 万ドル以上もの火災保険が掛けられてもただけに、たとえ木造ホテルとはいえ 20 室程度の規模を有するものだったはずである。なお、このホテルの真向かいには 41 番にあたり、ここには「マリーン・ホテル」が少し遅れてオープンされていた。

1875 年 8 月 7 日の午前 1 時に少し前、「ジャパン・ホテル」のビリヤード室より火災が発生し、この大きな木造ホテルを火に包んだ。<sup>66)</sup> 消防ポンプはすぐ現場に駆けつけたが、いつも居留地の火災がそうであったように、この時も給水が充分でなく消火に手間取る間に、裏手の 51 番の小さな店、43 番や 45 番にも延焼しそうな危険な様相をみせた。やっと放水が強くなり、近くの石造家屋と風向きにも助けられて、火元の「ジャパン・ホテル」と近くにあった小さな数軒の商家や靴店が延焼しただけで、幸い大火にならずにすんだ。

それにしても、ヘンリー・モスは不運な男だったといわなければならない。過去に「ブリティシエ・ホテル」を、今また「ジャパン・ホテル」を自分のところから火をだし灰にしてしまったからである。不幸中の幸いでもいおうか、モスはこのホテルと家具とに保険を掛けていたため、損害額 1 万ドルは保険金で補填され、すぐに新しいホテルの建築に取りかかる



ことができた。

モスの経営する「ジャパン・ホテル」は、1874年7月10日にW. カーティスに譲渡された。カーティスはこの年の6月30日に自分の経営していた「インターナショナル・ホテル」を他の人に譲った直後に、この「ジャパン・ホテル」に乗り替わったわけである。こうして、9月15日には「ジャパン・ホテル」内に新しいレストランを開店させたりしたが、<sup>67)</sup>1875年7月10日には再びモスの手に経営権は戻されることになった。つまり、カーティスの経営した「ジャパン・ホテル」は、1874年7月10日より翌1875年7月10日までの1年間であったが、この間、モスの方は一時横浜を離れたり、山手217番に居住したりしていた。

1875年7月に再びモスが経営に乗りだすと、夏場に向け8月1日以降は従来の料金を若干割り引き、月極めで40ドルから25ドルに値下げを決めた。そんな矢先の火事であった。火災の様子はさきに書いた通りだが、エリスという長期滞在のイギリス人が逃げ遅れ、6号室から梯子によって救出されているだけに、二階建てホテルであったとの見当がつく。

火災後、モスは隣接地43番でビリヤードとボーリング場の経営を先ず始め、これを広げてホテルとし、再び1876年に「ジャパン・ホテル」として再建した。しかし、43番のホテルは、かつてあった44番のホテルよりは狭く、またホテル経営に意欲的でなくなったモスは、1877年以降はローズ (G. W. Rose)、バッジ (J. Budge) ら他人に経営を任せたりし、1879年には遂にホテルの経営から完全に手を引いた。

43番Bに新たに建てられたホテルの規模は不明だが、1877年(明治10)当時の料金は、1泊1ドル、食事付き1泊1ドル50セント、月極め25ドル、食事付き月極め40ドルであったから、「グランド・ホテル」や「インターナショナル・ホテル」に較べると3割ほど安く、「カーティス・ホテル」などと共に中流クラスのホテルであったとみなされる。

1865年以降、10年以上に渡ってホテル経営を手懸けたヘンリー・モスは

1837年8月21日にイギリスのブリストルで生まれ、1859年末に帆船「デイスプリング」号 (Dayspring) の乗組員として来日し横浜に住みついた。ホテル経営から手を引いたあと、山手219番に居住して代理業や輸入商をしていたが、1905年1月11日に山手の自宅で逝去した。69歳であった。

山手外人墓地の一角に本を広げた型の墓碑がいくつかあるが、これらはモスと子供たちのもので、中に1892年4月にわずか1.6歳で夭逝したウォルター・モス (Walter Marin Moss) の碑も認められる。ところで、1937年11月13日に74歳の高齢で亡くなったモス夫人の碑をみて関心をそそられたことがある。そこにはクメ・モス (Kume Moss) とあり、1863年10月17日に東京で生まれたことが刻まれていたからである。ただそれだけのことだが、クメ夫人とは日本人女性ではなかったのかとの印象をすぐに受けた。

モス夫妻は、1883、1886、1890年と続けて息子や娘をもうけているので、結婚は1881年頃かと想定される。この時期、日本女性との国際結婚は決して珍しいことではないが、なぜか関心をそそられた。婚姻証明書は望むべくもないが、1972年に88歳で亡くなったチャールズ・モス (Charles Henry Moss) の追求からある程度の解明はできるものと考えられる。チャールズは文字通りのハマっ子で、横浜の経済復興や国際親善に大いに尽したことで、横浜と神奈川の両文化賞をも受賞しているからである。

#### ブルックリン・ホテル

波止場に近くイギリス領事館と向かい合う40番に「ブルックリン・ホテル」 (Brooklyn Hotel) がイギリス人のハロルド (Bernard Harold) により、バンクス (James Banks) をパートナーとして開業されたが、開業年は1870年初頭とみなされる。<sup>68)</sup>

このホテルは1879年10月まで営業が続けられたが、この間にあちこちのホテル経営に顔をだすスコット (M. Scotte) やクリテンデン (F.

Crittenden) に賃貸しした様子だが、ほぼ一貫してハロルドが経営していった。

この二階建て木造ホテルにはビリヤード場があり、「ファルトン・マーケット・ハウス」(Fulton Market House) という酒場も併設されていたが、船員や船荷の仲仕相手のホテルだったようである。

スコットが経営していた時には、「ブルックリン・ホテル・アンド・ピア・ターヴァン」(Brooklyn Hotel & Pier Tavern) と呼称されていたが、彼は1874年11月にJ. バンクスが所有していた「ニューヨーク・サルーン」(New York Saloon) の経営に乗りだしたため、スコットはこのホテルから手を引き、再び「ブルックリン・ホテル」と呼ばれるようになった。<sup>69)</sup>

1874年11月以降はまたハロルドが経営者となったが、今度はロス・フォクス(Ross Fox) を片腕として雇用し、実質上の運営は彼に任せた。ハロルドは1876年2月17日にフランス郵船に乗船して一時帰国したが、再来日する1878年3月15日までの約2年間、このホテルの全責任をフォクスに委ねていた。

1878年3月に横浜に戻ったハロルドは再びホテルの責任者となり、同時にしばらく休業していた「ファルトン・マーケット・ハウス」をこの年の6月15日に再開した。

1879年6月、「ブルックリン・ホテル」はセオン・ブラウン商会(Thos. Seon & C. Brown) の手で経営されることになったが、この10月11日に持ち主のハロルドが急逝したため、二階建てホテルとそれに付属する建物「ピア・ターヴァン」(Pier Tavern) などが11月1日に売りにだされた。<sup>70)</sup>しかし、この時点では買い手も借り手もつかないままだったため、競売の依頼を受けたウインスタンレー(J. Winstanley) は12月6日に再入札を求めたのであった。

「ブルックリン・ホテル」はしばらくの間休業が続いていたが、1880年6

月に入ると「ジャパン・ホテル」（後に「オクシデンタル・ホテル」）として開業され、1880年の項で触れるブロックレイ夫人によって経営されることになった。

「ブルックリン・ホテル」の最初のパートナーでもあったJ.バンクスは、1870年に「ニューヨーク・ホテル」に関わるようになるが、この点は次の「パシフィック・ホテル」で記述しておいた。

1879年中にハロルドの他にスコットも他界したので、スコットの経営していた「ニューヨーク・サロン」（「セイラーズ・ホーム」）という宿泊所も閉鎖された。なお、二人の墓は少し離れた位置だが、横浜山手外人墓地にみられる。

#### マリーン・ホテル

1870年（明治3）初め、イタリヤ系フランス人と思われるジアレット（Julien Giaretto）が、居留地41番の一角に「マリーン・ホテル」（Marine Hotel）を新たに開業した<sup>71)</sup>。この地番の敷地は300坪強であったが、1870年には他にもう3軒の家屋が建てられていただけに、規模としては小さなホテルであった。波止場に近い場所にあったので、船乗り相手の旅館か下宿を意図したもののようである。

1875年までこの地番にあり、この間の資料によっては「オテル・ド・ラ・マリーヌ」（Hôtel de la Marine）とフランス語で表記したものもあるので、どちらの名称でも呼ばれたものであろう。料理人にはフランス人のジョゼフ・ブラン（Josephe Brin）やグルフィエ（Theodoro Greffier）がシェフとして雇用されているが、料理が美味しかったとか、部屋が清潔であったとする旅行者の回想もなく、感覚的にはインとかターヴァンの域をでないものである。

ジアレットは夫妻で1872年暮れに一時横浜を離れ、再び横浜に戻ると1874年6月に居留地73番でフランス商品を商う店を開いたので、この頃に

ホテルの経営から手を引いたものと考えられる。ただ、「マリーン・ホテル」の後を受けてオープンされる「カンブリアン・ホテル」は、記録の上では1875年以降に開業されたようになっているため、1874年中はジアレットがなおも経営していた可能性はある。

1876年に入ると、ジアレットは居留地80番にあった店舗を一時借り受け、ここでフランス香水などの販売をしていたが、翌1877年9月にはドイツ領事館の前にあたる61番の一角で、「パンション・ブルジョワーズ」という下宿を始めることにした。しかし、このパンション経営は軌道に乗らず、同じ年に居留地45番に移転すると、ここで雑貨店を開くようになった。

ジアレット夫人はよほどホテル経営が好きだったものとみえ、1879年2月には45番の店舗を改築すると、またもここで「パンション・ブルジョワーズ」を開いた。<sup>72)</sup> レストランと喫茶室とを有したものだったが、このペンションも1年あまりで閉業に追い込まれた。45番は地の利としては41番より悪く、しかも60坪たらずの地所に三つの家屋の立つ所だったにもかかわらず、月極め料金がたとえワイン込みだったとはいえ30ドルと高くては、そうそう借り手もなかったことだろう。因に、20番の「グランド・ホテル」の月極め料金は、同じ時期40ドルであった。かくして1880年6月、夫人は夫と子供2人を連れて横浜を去った。

#### グランド・ホテル

居留地20番に横浜で最大のホテルとなる「グランド・ホテル」が新築されるのは1873年(明治6)のことだが、1870年にこの地番に、規模こそ全く違うが同名の「グランド・ホテル」があったことはほとんど知られていない。

20番の地所は704坪の広い場所で、一時期イギリス公使館がここにあったことからよく知られたところである。イギリス公使館は江戸の東禅寺にあったが、1862年6月ここで殺害事件が起こり、東禅寺に居住するこ

とを危険と判断した代理公使・ニール中佐と公使館員は、公文書をたずさえ7月11日に江戸から軍艦で急遽横浜に引き揚げた。この時、サトウや医師のウィリス（William Willis）らが落ち着いた先が居留地20番の家屋であったが、サトウは後にこのように書いている。

「この事件が起きると、イギリス公使館の館員たちは公文書類をまとめて急ぎ横浜へ舞い戻り、今のグランド・ホテル（筆者注：1873（明治6）年以降の「グランド・ホテル」）の立つ場所にあった一軒の家に落ち着いた。この家はホエイというイギリス人の持物だったが、彼は1879年に明らかに個人的な恨みから就寝中に殺害されてしまった。<sup>73)</sup>」

谷戸橋側のホエイの家屋は海岸通りに面していて、かなり大きな二階建て木造家屋と3軒の離れ家があり、その奥には石蔵とがあった。サトウとロバートソンのふたりが、ニール中佐よりあてがわれた住まいはこの長々と続いた二階家の一隅であった。しかし、1866年（慶応2）10月に来日した公使館員・ミットフォード（Freeman-Mitford）は、サトウとウィリスのふたりは3軒の小規模の家屋の一軒に住んでいて、自分はその別の家屋に住まうことになったと彼の書『回想録』の中で記述しているので、サトウたちは二階家屋から別棟に引越していたものとみえる。さらに、大男のウィリスが、どのようにしてこの家に入ったり出たりしているのか大きな謎だと冗談口をたたいている。また、サトウは家主のホエイに安い百科辞書の端本を、かなり高い値で買わされたことを『日本に於ける一外交官』（A Diplomat in Japan）で書き示している。

1864年10月1日に来港したハートレー（John Hartley）は、「居留地20番は、現在グランド・ホテルのあるところだが、ここにはイギリス公使と館員たちが公使館として使っていた巨大な石の建物があった。敷地内には、公使館員のペットであった茶色の熊が一頭いて、歓迎されない客から公使

と館員たちを守る“番熊”となっていた<sup>74)</sup>」と書いている。

この記事と1864年10月29日の「イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ」に掲載されているこの場所の精細な版画とを照らし合せてみると、ホエイの敷地内にイギリス公使館用の新しい建物がさらに1864年頃には建てられていることが認められ、確かに巨大な石の建物を思わせる。

居留地20番についての、もうひとつの証言を引用しておこう。

「20番にはホテルを目的とした未完成の建物があった。しかしながら、所有者のホイ氏 (Hoy) がある朝に殺害されているのが発見され、ホテルは決して完成されることはなかったのだ。犯人はみつからなかった。(一部略) この建物が現在のグランド・ホテル旧館の前身であった。<sup>75)</sup>」

これは1867年秋に来日したイートン (J. L. O. Eaton) が後に回想した文章だが、1867年代には未だイギリス公使館関係の建物があり、この年の11月にこれらの事務室などが売り立てられているので、実際には1869年の模様だったはずである。

サトウが「ホエイ」と書き、イートンが「ホイ」と書いた人物は同一で、イギリス人のヘンリー・ホウイ (Henry E. Hoey) という最も古いイギリス人居留民のひとりであった。ホウイは1869年12月27日の夜に、その数年前に彼に雇われ殴打されたことを根に持つ日本人の「セイキチ」によって切り刻まれて惨殺された。

ホウイはこの時には新築した家屋とは別の離れにたったひとりで住んでいて殺害されたが、「セイキチ」の共犯とされた「テツゴロウ」は、事件から1カ月たたないうちに逮捕され獄死したが、直接手を下だした「セイキチ」は逮捕されずに終わった。この怪奇事件は平穏な時代に起こったものだっただけに居留民の脳裏に刻まれ、後々までも消えさることのない印象を与えたものだったから、他にもなん人かの人たちの回想にでてくる。な

お、ホウイの遺体は横浜外人墓地に埋葬された。

ホウイがホテルとして建てた大きな3階建ての建物は、1870年初めに本稿でひんぱんに登場するW. H. スミス、ブローカーをしていたデアー (G. M. Dare), デービス (J. Davis) といったアメリカ人らシンジケートに買いとられ、彼らはリオンズ (Joseph Lyons) を支配人としてホテル経営に乗りだしたが、すぐに「横浜ホテル」を経営していたグリーン夫人らにまた貸しされた。しかし、グリーン夫人もすぐに兵庫に赴き、ここで「兵庫ホテル」を経営するようになったため、またも居留地20番のホテルは主を失った。1870年中に営業されたこのホテルは「グランド・ホテル」といい、1873年に新築される「グランド・ホテル」の文字通りの前身であった。

1873年に新規開店された「グランド・ホテル」はスミスをオーナーに、リオンズを支配人として発足したが、この顔ぶれは1870年の古い「グランド・ホテル」の経営陣と全く同じ人たちであったから、新たに新築したホテルも旧名をそのまま使用したにすぎない。

1872年版の「ディレクトリー」では「Grand Hotel, unoccupied」と記載されているのは、グリーン夫人が1871年7月に兵庫へ去った後の様子を指しているのもであって、1873年にでき上がる予定の「グランド・ホテル予定地」を指すものではない。したがって、「ディレクトリー」だけの調査では、古い「グランド・ホテル」名は1871年版に記載されているものしか目に止まらないわけである。

1870年に開業したこのホテルの規模を伝えるものはないが、1870年に明治政府の要請によって作成された石版印刷の精微な横浜居留地地図をみると、この20番の地所700坪ほどのうち150坪ほどの建て坪を有しているので、非常に大きな3階建てのホテルではあったといえる。

横浜に来る前に長崎で「ベル・ビュー・ホテル」を経営し、横浜では居留地37番の「横浜ホテル」や古い「グランド・ホテル」を手懸けたグリーン夫人は、1871年秋に兵庫で「兵庫ホテル」を開業した。当時の兵庫には、



「ベイ・ビュー・ホテル」, 「インターナショナル・ホテル」などもあったが、兵庫を代表するホテルは「兵庫ホテル」であったという。

「兵庫ホテル」が規模として一流のものであったかは別にして、イギリス人グリーンの未亡人となった彼女は評判の美貌の持ち主で、その上、ふたりの娘たちも兵庫では「港の華」と呼ばれたほどの美人であったから、後に回想する人たちにしてみると、どうしても豊満な肢体を持つグリーン夫人がまず脳裏に浮かび、次で「兵庫ホテル」がよかったと口をついででも止むを得ない。

1872年(明治5)春に京都で博覧会が開かれたが、この博覧会の開催中、グリーン夫人はやはり兵庫で「オテル・デ・コロニー」を経営していたガンドーベール(G. Gandaubert)と手を組んで、京都に臨時のホテルを開くという商売熱心なところもみせた。一時的なものだったにしろ、京都でホテルが開かれたのはこれが最初だったろう。

話しは違うが、グリーン夫人の娘のひとり、神戸居留地での主要メンバーであったコブデン(Richard Cobden)の甥に嫁ぎ、もうひとりの娘はこのホテルに投宿していたオーストラリアの金持と結婚した。

話しは前後するが、「グラント・ホテル」が1870年にグリーン夫人に経営がまかされたとき、アンダーソン、ニクソン、ニッケルの3人のパートナーがいた。アンダーソン夫人とニクソン夫人は、37番の「横浜ホテル」で顔をだす人たちで、ニッケル夫人も108番の「横浜ホテル」の後を受けて、「リトリート」という簡易宿泊所を経営するといったように、横浜居留地の小さなホテル、ターヴァン、インやハウスの経営者には女性の進出がめざましいものがある。なお、アンダーソンはグリーンの子供だったようである。

わずか数室の部屋があれば、すぐに荷揚げ人足らの下宿屋を開き、次で酒を提供するだけの商売はさほど元手も必要とせず、簡易食堂と共に女性向きの資本いらすの商売であったわけである。

グリーン夫人らがいまだ経営していた1871年3月22日、数名の男たちが「グランド・ホテル」に火を付け焼上させようとしたが、発見が早く未遂に終わった。こんな事件もあって、彼女たちはホテル経営から手を引いたのであった。

#### パシフィック・ホテル

このホテルの名称は1870年3月刊行のディレクトリーにしかなく<sup>76)</sup>、1869年暮れか1870年初めのオープンということになる。1870年1月18日にこのホテルと同じ地番70番にあったショイヤー・シットウエル商会(Schoyer, Sitwell & Co.)が全焼したが、この時の火災を伝える記事には「パシフィック・ホテル」の名前がでてこない<sup>76)</sup>ので、おそらくこの火災の直後に開業されたホテルであったろう。

70番の「パシフィック・ホテル」はホームズ(J. Holms)とマガイヤー(J. Maguire)の2名の共同経営で開かれたが、1870年中に「ブルックリン・ホテル」から独立したバンクスに経営は移された。

バンクスはこのホテルを「ニューヨーク・ホテル」へ名義変更したものの、つかの間の1871年にはストランドバーグ夫人の手に渡り、彼女はこれを「ゴールデン・ルール・ホテル」(Golden Rule Hotel)と名前を改めた。しかし、このホテルも1872年中には経営者が他に移転してしまうこともあって、先の経営者バンクスが再びここに「ニューヨーク・サルーン」(New York Saloon)という宿屋兼酒場を開いた。このサルーンは後日179番に移転してバンクスによって経営が続けられていったが、1874年11月にはスコットに譲渡されるといった目まぐるしさが続いた。

1870年初頭から1872年にかけての2年あまりの間に、居留地70番の一角には、「パシフィック・ホテル」「ニューヨーク・ホテル」と「ゴールデン・ルール・ホテル」の3軒が開業したが、これらのホテルは同一のもので名称を代えただけのものでしかなかった。

最初のホテル「横浜ホテル」で触れたように、波止場から本町通りへ至る港通りは多くの居酒屋、安宿、簡易食堂があって、その一角に位置する40番や70番のホテルは、船員たちのたむろす酒場兼宿泊所であったから、酒で酔いつぶれた男たちが専ら利用する場だったのである。この「パシフィック・ホテル」があった頃、70番には「バザール・パリジャン」(**Bazaar Parisien**)とか「バルナム・レストラン」(**Barnum Restaurant**)なども店を開いているだけに、「パシフィック・ホテル」自体も小さな安宿に過ぎなかった。

ホテルと名乗ってはいるが、バーに付随して数室の雑魚寝ができる部屋があれば金になったわけで、次に述べるホテルも同じようなものであった。

#### オールド・クラブ・ホテル

このホテルはこれまでも登場したトンプソン夫人の所有になるものだが、1870年版の「ディレクトリー」で居留地121番にあったことを記録しているだけで、<sup>77)</sup>他は皆無見当もつかないものである。

#### ニューヨーク・ホテル

居留地70番の「パシフィック・ホテル」がバンクス (**James Banks**) の手に渡ったあと「ニューヨーク・ホテル」(**New York Hotel**)と名称を代えたが、1871年中に「ゴールデン・ルール・ホテル」へとさらに名称変更がなされた。1870年から1871年にかけての一時期その名を留めただけのホテルで、後年「ニューヨーク・サロン」とか「ニューヨーク・ハウス」とも呼ばれていくようになる。この点は後述する「ゴールデン・ルール・ホテル」で記すことになる。

#### 1870年に横浜にあったホテル

「コマーシャル・ホテル」(**Commercial Hotel** 86番)

- 「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 164 番)  
「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128 番)  
「ノース・ジャーマン・ホテル」(North German Hotel 128 番)  
「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 44 番)  
「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 37 番)  
「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40 番)  
「セントラル・ホテル」(Central Hotel 31 番)  
「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18 番)  
「フェニックス・ホテル」(Phoenix Hotel 97 番)  
「マリーン・ホテル」(Marine Hotel 41 番)  
「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20 番)  
「パシフィック・ホテル」(Pacific Hotel 70 番)  
「ニューヨーク・ホテル」(New York Hotel 70 番)  
「オールド・クラブ・ホテル」(Old Club Hotel 121 番)

- 注 1) Spiess, Gustave “Die Preussische Expedition nach Ostasien während der Jahr 1860-1862” (1864), p. 164.  
2) Eulenburg, Friedrich “Die Preussische Expedition nach Ost-Asien nach amtlichen Quellen” (1864), zweiter Band. p. 2.  
3) 『ヘボン書簡集』(昭和34年) 高谷道男編訳. 24頁。  
4) ‘The North China Herald’, 1860. 3.10.  
5) Heine, Wilhelm “Eine Weltreise um die nördlich hemisphäre in Verbindung mit der Ostaiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861” (1864).  
6) Humbert, Aimé “Le Japon Illustré” (1870), pp. 379-380.  
7) “Japan Gazette Yokohama Semi-Centinnial” (1909), p. 7.  
8) 『幕末明治新聞全集』(第一巻), 4頁。  
9) 『横浜奇談 全』13-15丁。  
10) Siebold, Alexander Fr. von “Ph. Fr. von Siebold’s Letzte Reise nach Japan 1859-1862” (1903), pp. 86-87.  
11) Satow Paper’s: ‘Diaries’ [Oct. 1 1862 (Wed.)]  
12) ‘The Japan Herald’, 1862.6.21, 1862.10.25.

- 13) 清水 勲氏蔵。
- 14) 拙稿「横浜居留地のフランス系ホテル(1863-1899)」(『敬愛大学研究論集』第34号。121頁。
- 15) ‘The Japan Herald’, 1864.5.21.
- 16) 『幕末明治新聞全集』(一), 102頁。これによると, 1863年月日不詳とあるが, 新聞記事の内容が1863年11月の事柄に集中しているだけに, ホテルの広告もこの11月のものと判断される。
- 17) ‘The Japan Herald’, 1864.5.21.
- 18) 『横浜もののはじめ考』(横浜開港資料館) 40頁。
- 19) ‘The Japan Herald’, 1864.2.20.
- 20) Ibid., 1864.5.14.
- 21) Ibid., 1864.10.29.
- 22) Ibid., 1865.2.15.
- 23) Ibid., 1864.6.25.
- 24) 『幕末明治新聞全集』(一), 155頁。
- 25) ‘The Japan Herald’, 1864.8.13.
- 26) “Japan Gazette Yokohama Semi-Centinnial”, p.56.
- 27) Beauvoir, Ludovic comte de “Pékin, Yeddo, San Francisco — Voyage autour du Monde” (1872), pp.177-178.
- 28) ‘The Japan Herald’, 1864.10.29.
- 29) Ibid., 1865.2.18.
- 30) Ibid., 1865.3.4.
- 31) Ibid., 1865.7.1.
- 32) ‘The Daily Japan Herald’, 1866.12.5.
- 33) ‘The Japan Herald’, 1867.1.15.
- 34) Ibid., 1865.7.22.
- 35) Ibid., 1865.10.21.
- 36) Ibid., 1864.3.26.
- 37) Ibid., 1865.8.12.
- 38) Ibid., 1865.10.21.
- 39) Ibid., 1865.11.11.
- 40) Ibid., 1865.9.2.
- 41) ‘The Daily Japan Herald’, 1867.4.2.
- 42) ‘The Japan Times’ Daily Advertiser’, 1866.5.2.
- 43) ‘The Daily Japan Herald’, 1866.12.10.
- 44) Ibid., 1866.12.21.
- 45) Ibid., 1867.1.12.
- 46) Ibid., 1867.7.25.

- 47) Ibid., 1867.8.15.
- 48) "Chronicle and Directory for 1869", p.255.
- 49) 'The Japan Times' Overland Mail', 1869.11.6.
- 50) 'The Japan Gazette', 1868.9.25.
- 51) 'The Far East', 1870.10.17.
- 52) 'The Japan Gazette', 1868.9.25.  
"Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama 1870", 広告頁 21.
- 53) Barr, Pat "The Coming of Barbarians" (1967), p.193.
- 54) 'The Japan Daily Herald', 1874.7.2.
- 55) 'The Japan Punch', 1874.7.
- 56) 'The Japan Daily Herald', 1874.11.2.
- 57) 'The Japan Gazette', 1875.7.10.
- 58) Ibid., 1876.1.28.
- 59) 'The Japan Daily Herald', 1877.4.14.
- 60) Ibid., 1878.1.4.
- 61) Ibid., 1881.1.21.
- 62) "The Japan Directory for the year 1882" の広告頁。
- 63) 'The Japan Weekly Mail', 1873.2.1.  
'The Far East', 1873.2.4.
- 64) 'The Japan Weekly Mail', 1870.3.5.
- 65) "Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama 1870", p.7.
- 66) 'The Japan Weekly Mail', 1875.8.14.
- 67) 'The Japan Daily Herald', 1874.10.1.
- 68) "Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama 1870", p.7,  
広告頁 22。
- 69) 'The Japan Daily Herald', 1874.11.9.
- 70) Ibid., 1879.10.30.
- 71) "Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama 1870", p.7.
- 72) 'L'Echo du Japon', 1879.2.17.
- 73) Satow, Ernest "A Diplomat in Japan (1921)", p.29.
- 74) "Japan Gazette Yokohama Semi-Centinnial", p.60.
- 75) Ibid., p.12.
- 76) "Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama 1870", p.9.
- 77) Ibid., p.12.